穢される黄金姫

黒糖バス

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オリ王子が権力にもの言わせて美女達にエロい事する話。

目次

王国第3王子レオン 1
廊下での蛮行 14
悲劇の姫 28
青薔薇の受難 41
パーティー【前編】 55
パーティー【後編】 71
ラナー誤算 84
教会での悲劇 97
ギルドでの屈辱 110
シャルティア 126
少女達の絡み 144
ナーベ【前編】 159
ナーベ【後編】 174
大浴場 187

王国第3王子レオン

クライムは扉の前で息を整えるとコンコンとノックをする。
中から「入れ」と声が返って来たのを聞き「失礼します」と声をかけてから扉を開いた。
部屋の中には数名のメイド達が待機しており、クライムに対して目礼をする。
それに頭を下げて返しながら、奥のソファに腰掛けるこの部屋の主に視線を移した。
1人のメイドを背後に控えさせ、脚を組んで尊大に座っていたのは美しい容姿をした青年だ。
レオン・バチストゥ・オレリアン・ライル・ヴァイセルフ。
リ・エスティーゼ王国第三王子にして次期国王。
いずれこの国の頂点に君臨する予定の人物である。
いや、今現在、彼に逆らえる人間がいない以上、既に頂点に君臨していると言っても過言ではないだろう。
「待っていたぞ」とクライムを歓迎した彼は、対面のソファを勧めてくる。

一瞬躊躇しかけてから、言われた通りに着席したクライムは、緊張から額に薄っすらと汗を掻いていた。

正直に言うとクライムはこの王子の事が苦手なのである。

王族という高貴な位にあるという事も勿論関係あるが、レオンに関してはそれだけではない。

自分の邪魔になると判断した第一王子を罠に嵌めて殺したという容赦のなさ。

周辺諸国最強と名高い戦士であるという事実。

そして、一番大きい理由が彼の悪趣味の所為である。

クライムはさり気なくレオンの背後に立つメイドに目をやり、続いて扉の付近に並んでいるメイド達に視線を移した。

王子の専属になるだけあり整った容姿をしている彼女達は、ブレのない美しい姿勢で待機しており、それだけで使用人としての教養の高さを窺わせる。

しかし、彼女達は普通のメイドではあり得ない格好をしていた。

何故か全員メイド服のスカートをたくし上げた状態で固定していたのである。

その結果、細く美しい脚とその付け根にある下着が惜しみ無くクライムの前に晒されていた。

クライムの視線に気付いたのか、メイドの1人が恥じるように頬を染める。

その反応にクライムも慌てて「す、すみません」と謝罪の言葉を述べた。
彼女達のこの姿こそクライムが忌避するレオンの悪趣味である。
彼は人の嫌がる事、恥ずかしがる事を行うのが好きなのである。
色欲王子と陰で言われている様に、眉目の良いメイド達の下着姿にも興味はあるのだろうが、クライムにはそれよりもメイド達の反応を楽しんでいる様に感じられた。
メイドとしての誇りを持つ彼女達は、来客が訪れる度にその秘すべき場所を目撃されるのだ。
そのプライドは王子によってどれ程汚されて来た事だろうか。
なまじメイドとして一流であると分かるだけに、その姿は余計に憐れに思えた。
苦々しい表情をするクライムにレオンは声を掛ける。
「クライム。やはりお前も興味があるみたいだな」
「…何のことでしょうか殿下」
「コイツらのパンツを舐め回す様に見ていただろう?」
「なっ!私は決してその様なっ…!」
意地悪そうに笑う様子から、ただクライムを揶揄(からか)っているだけだと理解しながらも、メイド達から王子と同類だと見られたくなかったクライムは、大袈裟に反応してしまう。

「お前だってガキじゃないんだ。綺麗な女の下着に興味ないなんて事はないだろう？」
「…私は、嫌がる女性から見たいとは思いません…！」
「ふーん。そうなのか」
　ニヤニヤと心底楽しそうにクライムを眺めるレオンは、背後にいるメイドを手招きすると自分の隣に立たせた。
　そしてクライムに見せつける様にその太ももを撫で始める。
　くすぐったいのかピクピクと僅かに震える彼女は、それでも逃げる事もせず王子のセクハラに耐えていた。
「メイドをしているがコイツは伯爵家の娘でな。普段はドレスを着て貴族令嬢らしい格好をしてるんだぜ。本来、お前の様な一介の騎士如きがパンツを見れるような相手じゃないって事だ。しっかり見て楽しんでおけよ」
「いえ、私は…」
「クライム。しっかり見て楽しんでおけよ」
「！…は、はいっ…」
　歯切れ悪く答えるクライムを見るレオンの顔は、笑顔でありながら目が笑っておらず、クライムは慌てて返事をする。
　レオンはただのスケベなだけの王子ではない。

血の繋がった実の兄であろうと容赦なく殺す様な残虐性も持ち合わせているのである。

その彼が二度も同じ事を言ったのだ、例えどんなに下らない命令であっても従わない訳にはいかなかった。

レオンがメイドの太ももを両手でさすり撫で回す様子を、罪悪感を抱きながら凝視するしかないクライム。

そうすると、出来るだけ見ないように心がけていた逆三角形の布が自然と目に入ってしまう。

レースのあしらわれた水色のパンツは、薄っすらと彼女の大事な場所の形を透かしていた。

そういった物に殆ど耐性のないクライムは、耳まで赤くし、懇願するようにレオンへ視線を向けた。

「で、殿下。そろそろ私を呼んだ要件を伺いたいのですが」

「くははは。童貞感丸出しだな。まあ、いいや要件だったな」

「はい」

「お前ラナーの事好きだろ？」

予想外の質問に一瞬「え？」と聞き返してしまう。

幸いそれを不快に思う事はなかった様でレオンは愉快そうに続ける。
「だーかーらさぁ。お前は俺の妹が好きかって聞いたんだよ」
「い、いえっ…自分はラナー様の騎士ですので…そ、そういった感情は、別に…」
行く宛のなかった自分を拾ってくれた純粋で優しい少女の顔を思い浮かべながら必死に否定するクライム。
しかし、初心な少年のその姿を見て彼の気持ちに気付かない者などいないだろう。
当然、クライムの心などお見通しのレオンは「そうなのか」と納得したフリをしながらも、その目は「面白い玩具を見つけた」と言わんばかりに輝いていた。
「ソフィア、脚を開け」
「は、はい…」
クライムと話をしている最中もメイドへの悪戯を続けていたレオンは、ソフィアと呼んだメイドに命令して脚を肩幅まで開かせた。
タダでさえ下着を丸出しにするという淑女にあるまじき姿を晒していた彼女は、更に異性の前で脚を開かされ、恥辱に震える。
会話がいったん止み、逸らしていた目の前の光景に再び意識が行き、クライムは居心地悪そうに視線を彷徨わせた。
それを横目にして、レオンは遂にメイドの下着に指を触れさせた。

クロッチの部分を撫で上げられた彼女は思わず「ひゃっ」と小さく悲鳴を上げる。
そのまま下着越しに恥裂を上下に擦りながらレオンは会話を再開させた。
「ラナーの奴も16歳になっただろ?まだ胸は小さいが充分レディを名乗れるくらいには美人に成長したと俺は思うんだよ」
「む、胸…についてはわかりませんが、既にラナー様は立派な女性です」
「だろ?実際《黄金の姫》とか言われて貴族の男連中からのアプローチも多いみたいだしな」
「そう…ですね」
アプローチを受けていると聞き、愛する主が何処かの男性のモノになる光景を思い浮かべ「ズキリ」と胸に痛みを覚えるクライム。
しかし、次にレオンの口から発せられた言葉は、そんな痛みなど吹き飛ばすほど驚くべき物だった。
「だからさぁ、そろそろアイツを食っちまおうと思うんだわ」
「なっ!…今、なんと…?」
「あん?言い方が悪かったか?ラナーの処女を頂くって言ったんだよ」

「…で、殿下とラナー様は…腹違いとは言え、血の繋がったご兄妹でございますよね…？」

「ああ、そうだな。それがどうした？」

「…狂っている」と言う言葉をクライムはなんとか飲み込んだ。

妹の処女を奪うと宣言する事に全く躊躇がないこの王子の思考がクライムには理解出来なかった。

唖然とレオンを見返していたクライムは、今後起きるであろう最悪の展開を想像し絶望する。

幾ら常識的にあり得ない事でも、この王子が宣言した以上それは実行される事になるだろう。

この国にいる人間で彼を止められる者など誰一人いないのだから。

大きな権力を保有する六大貴族であろうと、裏社会を支配する犯罪組織《八本指》であろうと、そして現在の国のトップであるランポッサ国王であっても彼には逆らえない。

何故なら彼には個人で国を相手取れる程の圧倒的な『力』があるのだから。

冒険者の間で使われる難度で表せば１５０。
常人を超えた英雄達さえ凌駕する真なる超越者。
神の血を引くと言われる女性から生まれた人外。
それがレオン・バチストゥ・オレリアン・ライル・ヴァイセルフという男であった。

☆

頭が真っ白になっていたクライムの耳に「クチュ…クチュ…」という粘り気のある音が聞こえてきた。
顔を上げてそちらを見ると、いつの間にかレオンの指で濡らされていたメイドの下着が目に入る。
零れた愛液によってペタリと恥裂に張り付いた下着は、彼女の縦線をしっかりと表していた。
与えられる快感に必死に耐えている彼女だが、時折「あっ…」と甘い声を漏らしている。
「凄ぇエロいだろ?こんなんでもコイツ、後輩のメイド達からは真面目な先輩として慕われてるんだぜ?仕事中にマンコ弄られて感じてる姿を見せてやりてぇな」

涙目になり、漏れ出る声を我慢出来ずにいる彼女は、クライムが最初に抱いた『仕事の出来そうなクールな女性』という印象からも外れ、その顔を蕩けさせていた。
あまりに卑猥な姿に、クライムの股間も自然と硬くなってきた。
自分の主である無垢な少女に知られたらどう思われるだろうか、と後ろめたい気持ちを抱いてしまう。
レオンは一度手を退けて、メイドの濡れそぼった下着をクライムに見せてくる。
「お前もラナーの奴のこーゆー姿が見たいだろ？」
どう答えたら良いか分からず沈黙するクライムをクスクスと笑いながら、レオンは下着の横から指を入れた。
下着の中で上下に動かされる指に、とうとう我慢の限界が来たのか「あっ…いやっ…！」と大きな声を出してしまい、咄嗟に口を塞ぐメイド。
直接触られての愛撫に「クチュクチュクチュッ」という水音が秘部から響く。
いつの間にか股布の部分が横にずれてしまっており、レオンの指を根元近くまで飲み込んだ肉壺がクライムの目にも見えていた。
「あぁぁぁぁっ！…殿下っ…た、達して…しまい、ますっ……！」
「なーに上品ぶってんだ。この間教えてやったばかりだろうが」
「あぁっ……イ、イきますっ！…殿下の指でっ、お、オマンコくちゅくちゅされてっ…！

イっちゃいますっ…！」

最早喘ぎ声を我慢することさえ辞めた彼女は、淫らに言葉を並べる。

その姿を見て、敬愛するラナーも同じ様に善がる事になるのだろうか、と考えてしまうクライム。

限界まで膨らんだと思っていた股間の一物が更に大きくなるのがわかり、自分に嫌悪感を抱く。

「仕上げだ！盛大にイきやがれ」

「はぁぁあっ!!…イクッ！イきますぅぅっっ!!!」

雌の穴をレオンの指がズボズボと出入りするのに合わせて、腰を小さく前後に振ると、しばらくして大きな嬌声を上げながらメイドは達してしまった。

力が抜けたのか床にペタンと座り込んだメイドを見下ろし、レオンは懐から白い布を取り出して手を拭った。

そして、そこで何かに気付いた様に「あっ」と呟くと、愛液を拭った布をクライムに差し出した。

「悪い悪い。そう言えばお前を呼んだのこの為だったわ」

?:このハンカチがですか?」

「ハンカチじゃねぇよ。開いてみろ」

丸まった布を言われた通りに広げると、その正体が露わになった。
逆三角形のそれは縁にレースが付いており、全体に華の形の刺繍が施されていた。
前面にワンポイントで赤いリボンの着いたそれは、どう見ても女性のパンツであった。
「こ、これは…下着、ですか？」
「ああ。代わりに返しといてくれ」
「…えっと、どなたの物でしょうか」
一連の流れから、持ち主に予想が付いていたが、それでも確認の為に訊ねる。
「ラナーのだけど？」
クライムの予想は的中していた。
自分が今持っているのが、敬愛する主の下着であると認識してしまったのだ。
これを彼女がドレスの下に身につけ、大切な場所に触れさせていたのかと邪な想像をしてしまう。
パンツの内側。
ラナー王女のあの部分が触れていたであろう場所に自然と視線が吸い寄せられてしまったのは仕方のない事だった。
「どうして殿下がこれを持っておられるのでしょうか」

「洗濯のメイドがラナーの衣服を運んでるのを見てな。つい奪ってしまった」
「…はぁ」
「喜べ。洗濯前の物だから匂いは落ちていないし、よく探せば染みなり下の毛なり付いてるかもしれないぞ」
「そ、それは…」
もう一度手の中のパンツに視線が行き、言われた物を探しそうになって慌てて首を振る。
「こ、これは私が責任を持って洗濯に出しておきます！」
「そうか。任せた。もう帰っていいぞ」
「ハッ！失礼します」

ブツを慌てて懐にしまったクライムは、レオンに背を向けて扉へと進んだ。
途中、下着を晒したままのメイド達に視線をやらない様に意識しながら通り過ぎ、そして部屋を後にしたのだった。
クライムが、手に入れた下着を洗濯に出すのが少し遅れた事は言うまでもないだろう。

廊下での蛮行

王国に巣食う堕落した貴族達。
領内で眉目の麗しい娘を見つければ誘拐同然に屋敷へと連れ込み、飽きればゴミの様に捨てて新しい標的を探す。
そんな彼等と第三王子レオンとの違いは何か。
そんな物は数えきれないくらいあるだろうが、特に大きな違いをあげるとするなら、それは標的となる女の身分である。
いくら愚かで色に狂っていようと普通の貴族であれば、他の貴族や高価な衣服に身を包んでいる女性には手を出しはしない。
しかし、この男(レオン)は違う。
平民だろうと貴族だろうと彼にとっては等しく自分の獲物に過ぎないからだ。
むしろ、綺麗どころの多い貴族の令嬢こそ彼の好物であるとも言える。
現在、そのレオンはある女性に声を掛けていた。
「ラキュース。前も聞いたが俺の妾になるつもりはないか？」
「殿下。私はまだ冒険者として人々の役に立ちたいのですわ。ですので、まだ誰の物に

もなるつもりはありません」

「ククク。この俺の誘いに「否」と答えられるのはお前やラナーくらいのものだろうな」

殆どの者が逆らう事の出来ないレオンに対し、しっかりと自らの考えを述べる金髪の女性。

王城にいる為、今は桜色のドレスに身を包んでいるが、普段はいくつもの装備で身を固めている。

彼女は王国で知らぬ者のいない最高位冒険者であった。

アダマンタイト級冒険者チーム《蒼の薔薇》のリーダー。

英雄の領域に踏み込んだ人類の切り札。

それが彼女、ラキュース・アルベイン・デイル・アインドラである。

王国どころか他国からも一目置かれる彼女だが、しかし、そんな事など御構い無しにレオンは行動する。

ラキュースは自分の胸へと伸ばされる手を、一歩下がる事で回避する。そして「お戯れが過ぎますわ」と完璧な作り笑顔で返した。

「従順でない女は珍しいからな。俺を二度も拒否したその不敬は見逃してやろう」

「…ありがとうございます」

「だが」

瞬間、レオンはラキュースの視界から消え失せた。
冒険者として目の前で会話していた人物の動きを目で追えなかった事に敗北感を抱きながら、ラキュースは辺りに視線をやる。
その直後、彼女は自分の胸と下半身を触られる感触を覚え、慌てて逃れようとした。
しかし「動くな」という威圧感のこもった一言だけで、その場に釘付けにされる。
「…だが、俺を簡単にあしらえると勘違いされては困るぞ。お前を含めこの国の全ては俺の物なのだからな」
ドレス越しに胸と大切な場所を撫でられ、頬を染めながら「…はい殿下」と返事をする。
貴族という身分も、最高位冒険者としての力もこの王子の前では無意味な物だとラキュースは再認識した。
結局、自分は多少の反抗をして彼を楽しませる事だけを期待された、他の令嬢達と同じ彼の被支配者なのだ、と。
「楽しみは残す性質(たち)でな。今日はもう行っていいぞ」
「は、はい。失礼します殿下」
「あ！そうだ。やっぱり待てラキュース」
「…何か？」

足早に去ろうとしていたラキュースは顔を強張らせながら振り返る。
それに悪戯を思い付いた子供の様な笑顔をしたレオンは一言「パンツを脱いで行け」とのたまった。
「それは…どういう…」
「今日は自分でヌきたい気分でな。お前のパンツを使ってやると言っているのだ」
「なっ…」
どうしようもない程意味が分からなかった。
この男は女性を何だと思っているのだろうか。
しかし、いくら巫山戯(ふざけ)た命令だろうとこの王子は本気で言っているのだとラキュースは理解していた。
何とか諦めて貰えないかと言葉を探す。
「私はこれからラナー王女の所に用事があるのですが…」
「そうか」
「ですので、下着を殿下に渡してしまうと…」
「なあ、ラキュース」
普段の彼女ではあり得ない程、オドオドと臆した様子で拒否しようとするラキュース。

そんな彼女の名前を、いくらか低くした声でレオンが呼んだ。
「はい…」
「これで三度目の拒否だな」
「なっ…す、すみませんっ」
「四度目は許さん。早く脱ぐが良い」
笑顔の消えたレオンに英雄たるラキュースが心底怯える。
これ以上不機嫌にさせては不味いと判断した彼女は、頬を赤らめ、一瞬だけ躊躇した後、ドレスの中に手を入れた。
無表情を作りながらも内心で高笑いしているレオンは、その様子を腕組みして眺めていた。
場所は王城の廊下。
時間が経てば誰かが通りかかってもおかしくない。
そんな場所でラキュースは自らの下着に指を掛けた。
スーっと下りていく下着が太ももに達し、大切な場所が空気に触れるのがわかった。
そのまま膝、足首と下げ終わると、脚を浮かせて下着を脱ぎ取る。
「ほう。ピンク色か」

ドレスの中から現れた下着を確認して、レオンは口笛を吹く。
あまりの恥ずかしさに耳まで赤くなったラキュースは、下着を小さく丸めると「どうぞ」と小さな声で差し出した。
強い女が自分に屈服する姿ほど唆られるものはない。
レオンは彼女から下着を受け取ると、仄かに感じる体温を掌で堪能し、そして彼女の目の前でそれを広げた。

直前まで自分が履いていた下着を廊下のど真ん中で晒される形になったラキュースは、しかし、その蛮行を止めることも出来ずに顔を伏せる。
王都でも女性に人気の店で購入しただけあり、彼女の下着は可愛らしい装飾を施されていた。
花柄のレースがついたローライズのパンツは、堅いイメージのあるラキュースが履くには少々可愛らし過ぎると感じるが、そのギャップがレオンを大いに興奮させた。
その後、下着を裏返してクロッチの部分を確認する。
「おや？小さいが染みが出来ているぞラキュース。俺と話していて興奮していたのか？」
実際はそんな物ありはしなかったが、ラキュースを辱める為に嘘を吐く。

そんな筈はないと思いながらも「もしかしたら…」と脳裏を過ってしまったラキュースは、レオンの両手を包み込む様にして下着を隠し、弱々しく懇願する。
「これ以上は、どうかお許しください…」
目を潤ませて頭を下げる。
それはラキュースが冒険者になって以来初めて取った無力な女の仕草だった。
この王子にはただただ低く出て慈悲を乞うしかないのだと、ここまでのやり取りでラキュースは理解していた。
それが功を奏したのかレオンは満足そうに笑うと、ラキュースの下着を懐にしまった。
ラキュースは無意識に漏れそうになる安堵の溜息をなんとか堪える。
「そう言えば、昨日初めてを迎えさせてやった子爵家の娘も似たような物を身に付けていたな」
初めてを奪った、の間違いではないだろうか。
そう内心で思いながらも、まだ下着の話を続けるレオンに笑顔で答える。
「今の流行りだからでしょうか」
「ほう。冒険者はもっと地味な物を履いていると思っていたぞ」
「他の子は分かりませんが、私は淑女の嗜みとして常に身だしなみに気を付けています

ので」
「なるほどな」
何かを納得した様子のレオンは続けて爆弾を投下する。
「お前の仲間は女揃いだったな。次会う時までにそいつらの下着を用意しておけ。冒険者の下着に少し興味が湧いた」
「っ……わかりました」
咄嗟に拒否しそうになるのを、何とか飲み込むことに成功したラキュースは、表情を曇らせながら了承の返事をした。
「時間を取らせたな。下着の替えは洗濯をしているメイドに言って新品の物を貰うが良い」
「…そうさせて頂きます」
「うむ。今度こそ行って良いぞ」
「はい…それでは」
スカートを抑えながら歩いていくラキュースの背中をしばらく眺め、レオンも反対方向へと歩き始めた。
☆
クライムは自らの主人であるラナー王女と共に王城の廊下を歩いていた。

少しお転婆なところのあるこの王女は、友人を呼んでおきながら「クライム、散歩に出掛けましょう」と彼を連れて庭に出ていたのだ。

そして約束の時間が近付き、慌てて部屋へと戻っている最中である。

「あら？あれはお兄様かしら」

前を歩く主人が発した言葉に、思わず顔を歪めるクライム。

それを見てクスクスと笑ったラナーは「そんな顔をしてはダメよクライム」と指を立てて優しく叱る。

「すみませんラナー様」

「クライムはどうしてそんなにお兄様を苦手にしているのかしら」

「それは…」

毎日の様にメイドや貴族の令嬢を無理やり部屋に連れ込み、また、不正を成した貴族を容赦なく殺すレオン。

この無垢で穢れない王女は、自分の兄王子のそんな恐ろしい面を知らないのだ。

レオンを優しい王子と信じて疑わない彼女は、今も嬉しそうに手を振っている。

「やあ、ラナー。それにクライム奇遇だな」

「はい。お兄様もお散歩ですか？」

天然なところのあるラナーの発言に、レオンは可笑しそうに笑う。

「ふふふ。ラナーは城を散歩していたのか。まだまだ子供だな」
「まあっ！私はもう立派な淑女ですわ」
「そうなのか？先程アインドラ嬢がお前に会いにいくと言っていたが、まさか淑女のお前が客人を待たせてる、なんてことはないよな」
「あっ！そうでした。お兄様、私急いでいるのでした」
レオンの遠回しな揶揄いに気付かず、慌てて去ろうとするラナー。
その様子を見てレオンは優しく微笑んでいた。
「待てラナー」
「何でしょうかお兄様。ラキュースを待たせているので早く戻らないといけないのですけど」
「そのアインドラ嬢から伝言だ」
「まあ、そうでしたか。それでラキュースはなんと？」
「ククッ……なんでも下着を履き忘れて来たらしくてな、メイドに借りにいくから遅れるそうだ」
心底可笑しそうに伝言とやらを伝えるレオン。
その言葉をそのまま受け取って「ラキュースどうしちゃったのかしら」と不思議そうに首を傾げる主人を見て、クライムは苦々しく思った。

この色欲王子と会って下着が無いとなると答えなんて分かりきっている。
と言うか、先程からラナーの見えない位置でクライムに見せつけているピンクの布こそ、ラキュースが履き忘れた筈の下着に違いない。
「ラナー。お前はちゃんと下着を履いているか？なんなら俺が確認してやるぞ」
「…お兄様、流石に冗談が過ぎますわ」
あんまりな台詞に流石のラナーも不快感を露わにする。
その後ろではレオンが何を企んでいるのかと、ハラハラしながら見守るクライムがいた。
それで諦めてくれないかと僅かに期待するが、それは甘い考えだった。
レオンはいきなりラナーを抱き寄せると、彼女の肩を抱いた。
いつもの優しい兄とどこか違うと気付いたラナーは不安気な表情で抵抗を試みる。
「お兄様、やめてっ」
「殿下！ラナー様がいやがっています！」
慌てて近付くクライムをひと睨みすると、レオンは妹の慎ましい胸に手を伸ばした。
そしてクライムに見せつける様にゆっくりと揉みしだき始めた。
「キャッ！お兄様、やめて下さいっ。冗談が過ぎますっ」

「小さいと思っていたが、少しはあるな」
「やめないとお父様にっ…お父様に言いますよ」
「あの老いぼれに何が出来るんだか」
必死に逃れようとするラナーをガッチリと捕まえたまま、遂にはドレスの上から手を忍び込ませる。
誰にも触れられた事のない胸を直前撫で回され、その頂きの敏感な部分まで触られたラナーは顔を赤くし、目の端から涙を流し始めた。
「お兄様…やめっ…」
「喜べラナー。胸は合格点をやろう」
「んっ…そんなものいりません…」
「仕方ないな。最後に下だけ確認したら終わりにしてやる」
愛する主人の痴態を努めて見ない様に目を閉じていたクライム。
大切な人も守れない無力な己を悔やみながらただ時間が過ぎるのを待っていた彼にレオンは声を掛ける。
「クライム。もっと近付いて見ていろ。ちなみにこれは命令だ。従わなくてもいいが、その場合ラナーの貞操は保証せんぞ」
「くっ……わかりました。見ていますので、これ以上は…」

「クライム……いやっ、見ないでっ…」
「すみませんラナー様…」
イヤイヤと首を振るラナーに罪悪感を抱きながら、その目前まで近付く。
それを確認すると、レオンはラナーのドレスを一気にたくし上げた。
「キャアァッ」と言うラナーの悲鳴をどこか遠くに感じながら、クライムの目は露わになった下着に釘付けとなった。
フリルのついた総レースタイプの下着は、薄い紫色をしていた。
緩やかに盛り上がった土手の部分にピタリと張り付き、その形を下着越しにも教えてくれている。
その下へと視線をズラすと羞恥に震えている白い太ももが目に入った。
普段ドレスに隠れて見る事の出来ない美しい脚は、内股気味に閉じられ、クライムには下着以上に煽情的に感じられた。
ドレスがまくられていた時間は何秒だろうか。
クライムには永遠にも感じられた究極の光景は、ハラリと重力に従って落ちていったドレスによって隠されてしまった。
クライムが気付いた時にはラナーは泣き崩れており、レオンは彼女を見下ろして「良い物見たぜ」と笑っていた。

慌てて主人に駆け寄ったクライムは、嫌がる彼女の下着に夢中になってしまった自分を心の中で罵倒した。

レオンはそれで満足したのかいつの間にか消えており、後には1組の主従が残された。

ちなみに鎧の下で膨らんでいたクライムの一物を確認し、ニヤリと口元を歪めたお姫様がいた事には誰一人気付く事はなかった。

悲劇の姫

王城の庭にあるベンチに一人腰をかける騎士がいた。
前日に意中の少女のパンツを目撃したクライム少年である。
彼は昨日から己が見た光景を何度も思い出して悶々としていた。
何年もの間、密かに想っていたラナーのあられもない姿である。
この歳の少年ならば仕方のない事だが、ふとした瞬間に脳内で再生されてしまうのだ。
しかしクソの付くほどの真面目さを誇るクライムは、その度に「申し訳ありません！ラナー様」と主人への謝罪を述べながら、必死にその記憶を消そうと壁に頭をぶつける。
これまでもレオンとラナーが会話をする場に立ち会った事は何度かあった。
その時には多少のボディタッチこそあったが、それは家族間のさりげない物であった為何の問題もなかった。
しかし、昨日のレオンの行動は明らかにそういったモノとは異なっていた。
アレでは長い時間をかけて築いてきたラナーとの信頼関係を失いかねない。いや、

もう彼女が兄に無垢な笑顔を向ける事はないのではなかろうか。

「それを覚悟の上、でしょうか…。あの時言っていた言葉はやはり本気なのですね」

以前、レオンの私室で宣言された言葉を思い出す。

あの時彼は「ラナーの処女を頂く」と確かに言っていた。

ならば昨日の暴挙はまだ前座に過ぎないのではないだろうか。そうクライムは思い至った。

「例え何も出来ないとしてもラナー様の側にいた方がいいのでしょうか…」

自分が側で見ている事で敬愛する主人が余計に心に傷を負うのではないか、とそんな事を考えてしまう。

しかし、自分のいない所であの色欲王子の毒牙に掛かるラナーを想像し、強い絶望感が溢れてきた。

そして彼は、何があっても側で見届けようと決心した。

☆

それから数分後、ラナーがレオンの私室に呼ばれた事を知り、慌てて向かった彼は、兄の陰茎によって無理矢理口内を犯される愛する少女の姿を目撃する事になる。

「お呼びでしょうか?お兄様」
　クライムが一人で悩んでいた頃、ラナーは兄であるレオンの私室を訪れていた。
　彼付きのメイド達は今日は下着姿で仕事をさせられている。
　そんな彼女達を一切気にする事なく、その横を通り過ぎたラナーはレオンの対面に腰かけた。
「よう妹よ。昨日のアレはどうだったよ」
「お兄様の気持ち悪い演技は減点ですが、まあ悪くありませんでしたよ」
「フッそうか。俺も寝取りプレイは大好きだからな。お前のくだらん遊びにも付き合ってやるよ」
「お兄様が好きなのは『寝取りプレイ』では無く『本当の寝取り』では?婚約者の目の前でそのお相手の初めてを散らせた話は聞いています」
「ああ、アレか。くははは。あの女のナカは結構気持ち良かったな」
　聞いただけで気分の悪くなりそうな会話をする二人。
　このやり取りだけ分かるように、昨日の彼らによる騒ぎは全て仕組まれた物であった。
　クライムの前では無垢なお姫様を演じていたラナーは、現在、冷めたい瞳でメイド

達を眺めながらレオンとの会話に興じている。
　人が虫ケラを無価値な存在として見るように、彼女は人を無価値な存在として見ていた。
　あまりの知性の高さ故に人間を同族として見ることが出来ない。
　同族のいない孤独な世界で生きてきたせいで精神が歪んでしまった精神の異形。
　それこそが彼女ラナーの本性である。
「クライムはとても可愛いのだけど、少し奥手なところがありますからね」
「だから刺激が欲しかったとでも言うのか？それならお前が押し倒したりすれば良いではないか」
「それはいけません。だってクライムは私を純真無垢なお姫様だと信じているのですから。こちらから迫るなんて出来ません」
　妹のよく分からない拘り（こだわ）に「ふーん」と返すと、レオンは立ち上がった。
「さて。お前の遊びに付き合ってやったお礼をしてもらおうか」
「お兄様も充実楽しまれていましたけど」
「それでも労働には対価が必要だろう？」
「…わかりました。これからも手伝って貰わないといけませんしね」
　納得したと言うより諦めた様子でため息を吐くと、ラナーは座ったまま横にずれて

ソファーにスペースを作る。
　了承を受けレオンはラナーの隣に出来たスペースに腰をかけた。
「それで私は何をすればよろしいのですか？」
「何もしなくても良い。ただ俺にされるがままになれ」
　レオンは小さな肩を抱き寄せると指をドレスの胸元に掛ける。
　そしてそのままゆっくりと下へと引っ張っていき、ラナーの白い下着に包まれた胸を露出させた。
　ブラジャーの上から幼い双丘を摩り、感触を楽しむ。
　少しずつ上へと押し上げられていったブラジャーの下から桜色をした突起がチョコンと顔を出した。
「可愛い乳首をしているじゃないか」
　ラナーの耳元でそう囁くと、人差し指で乳首を弾いて遊び始めた。
　弾かれる度にぷるんと揺れる乳首を眺めながら、妹の耳を甘噛みするレオン。
　その後、親指と人差し指で乳首を挟むとギュッと捻った。
「痛いですお兄様」
「ああ、すまんな。それにしても貧乳も案外悪くないモノだな。乳首が強調されて一層卑猥に見える」

「はあ…それは良かったですね」

まるで人ごとのように返事をしたラナーは自分の身体に夢中になるレオンを冷めた様子で見ていた。

レオンはその後もラナーの乳首を弄び続けた。

時折微細な振動を加えて確実にラナーの性感を高めていく。

少しして、プクッと膨らんできた乳首を嬉しそうに摘(つま)んでラナーに見せつけた。

少しはラナーの照れた顔を見れる事を期待して、羞恥を煽る様に乳首を引っ張ってやる。

しかし、彼女の表情に大した変化が無いことがわかると、つまらなさそうに指を離した。

そして、今度は彼女の下半身へと標的を移した。

水色のドレスの上から股の間をなぞり「次はここを触るぞ」と言外に伝える。

スカートの裾を掴み、めくっていくとストッキングに包まれた脚が露出した。更にその根元までスカートを上げていき、腰の部分に押し込んで固定すると白い下着が目に入った。

「ん?これ、クライムの奴に渡したパンツではないか?」

見覚えのあるフロントのリボンを触りながら、レオンは訊ねる。

「そうですよ。クライムが使用した下着です」
「それを分かっていて履くのか。変態だな」
男が使った下着と知って僅かにテンションを落としながら、レオンは陰部へ指を触れさせた。
指先から伝わる体温と下着のすべすべとした肌触りを堪能する様にゆっくりと指を這わせる。
プニプニと恥肉の部分を押し込んで弾力を楽しんでいると、ちょうど割れ目に当たったのか指が深く沈んでいく。
恥丘を掌で包む様にして撫でた後、レオンは中指を立ててその少し下の部分を円を描く様に刺激し始めた。

「んっ……そこは少し擽ったいです」
「陰核の周りだからな。これで感じない様なら女としての価値が無い所だったぞ」
左手の指でラナーの乳首を転がしながら、右手は下着の上で円を描き続ける。
時折バイブの様に指を振動させてみたり、陰核のある辺りを指で突いたりして少しずつ快感を与えていく。
レオンが指先に湿り気を感じたのは愛撫を始めてからしばらく経った時だった。

視線をやると、純白の下着の一点に小さな染みが出来ていた。
そこに指を充てると染みを広げる様に指を動かす。
「……チャッ……チャッ…」と水音が聞こえてくる頃には染みの大きさは金貨ほどにまでなっていた。
更に、ずっと刺激を与えていた陰核も下着の上から分かるくらいに膨らみ、布を押し上げている。
レオンは強敵に勝利した様な心境でラナーに声をかけた。
「気持ち良かったのか？ここがこんなに主張しているが」
それに対し、最初同様冷めた態度で彼女はため息を吐いた。
「お兄様、私を恥ずかしがらせるのが目的でしょうが、時間の無駄だとは思いませんか？」
「あん？」
「それはただの生理現象に過ぎませんし、私はその程度で乱される様な普通の精神はしていないと言っているのですよ」
そこでレオンは妹の自分を見る瞳に何の感情も込められていないことに気付く。
そして、それは自分がそこらのくだらない人間を見る時と同じモノだという事にも。
ここにきてレオンはようやく理解したのだ。

「そうかお前、俺の事も見下していたんだな」
「？　ちゃんと他の方より優秀だと認識していますけど」
「ああ、そっかそっか」
レオンはラナーを愛撫していた手を離すと、可笑しそうに笑う。
この自分を上から見下ろし評価している人間がいようとは、夢にも思わなかった。
ラナーは確かに頭が良い。
だが、言ってしまえばそれだけである。
頭の良さだけでなく単純な武力も、何者も逆らえない権力も持っている自分をまさか下に見ているなんて、レオンは想像もしていなかった。
ひとしきり笑った彼は、若干の苛立ちの篭った目でラナーを睨む。
「何というか…お前ムカつくわ」
気付いた時にはラナーは頭を掴まれ、レオンの膝の上に押さえつけられていた。
すぐ目の前には彼の股間があり、ズボンの上からでもそれが膨らんでいるのが分かる。
「っ……いきなりなんですか」
「生意気な女ってのは徹底的に躾けたくなるだろ」
「何か気に障ったのなら謝りますから、あまり乱暴にしないで下さい」

本当にレオンの怒りの原因が分からず困惑しながら言葉をかけるラナー。
その様子を見てレオンは彼女が人の心が分からない異常者である事を思い出した。
途端にそんな相手にイライラしている事が馬鹿らしくなり「悪い悪い」と笑いながら彼女の頭を掴んでいた自分の手を退ける。
一気に冷めてしまった気持ちをラナーに奉仕させる事で再び高めようと、ズボンの中から一物を露出させた。
「ちょうど良い体勢になったし、そのまま俺のチンコを舐めてもらおうか」
「わかりました」
初めて見る男性器にも大して興味を持つことはなく、ラナーはただ作業的にその一物に舌を這わせた。
チロチロと小さな舌で先端に触れる。
思いの外気持ちの良い感触にレオンは思わず「うおっ」と声を出してしまった。
「んっ…気持ち良いですか?お兄様」
「ああ、想像以上だ」
そう返してやると「それは良かったです」と言いながら口淫を再開する。
両手でチンコを掴み、亀頭を舐めるラナーはどこか小動物の様に見えて、可愛いと感じてしまう。

その頭を撫でてやりながらレオンは彼女に身を任せた。

☆

ラナーのフェラチオが始まってどれくらい経過しただろうか。

陰茎を舐める「チュッ…チュッ…」という音だけが聞こえていた部屋に突然ノックの音が響いた。

「すみません。こちらにラナー様はいらっしゃいますでしょうか」

続いて聞こえてきた少年の声にラナーが嬉しそうに顔を綻ばせたのを見て、レオンは何となく気に入らない気持ちになる。

慌てた様に乱れた身嗜みを整えようとしていたラナーの手を止め、扉の外に向かって「入れ」と入室の許可を出した。

「失礼します」と一言述べてから入室して来たクライムは、そこで無残なラナーの姿を目撃し、言葉を失った。

胸元は完全に露出し、小さな双丘を晒しており、下半身では捲り上げられたドレスは彼女の秘すべき場所を隠す役目を放棄していた。丸見えとなった白い下着は遠目にも分かる程濡れている。

そして何より驚くべき事に、彼女はレオンの下半身に顔を近づけ、その麗しい唇で彼の一物に奉仕していた。

「ラ…ラナー様…」
「クライム……いやっ…見ないでっ…！」
最初から見ていたメイド達が思わず「ええ?」と言ってしまう程の演技力でもって、一瞬で『悲劇の姫』へと成り代わった。
「クライム。そこで動かず見ていろ」
レオンは愉しそうにクライムに命令すると、ラナーの演技に乗っかる事に決めた。
ラナーの頭を掴んで一物に近づけると、その小さな口へと無理やり突っ込んだ。そして、苦しそうに顔を歪める彼女を無視して腰を振り始める。
まるで性欲を発散する為の道具の様に扱われる主人を見てクライムは唇を噛む。
そんな彼に見せつける様にレオンはラナーの下着に手を入れ「クチュクチュ」と音を立てながら手マンを始めた。
下の口からエッチな水音を出し、上の口からは「んはっ…あんんっ」と苦しげな声を漏らす王女。
それは彼女が達して大きく震えるまで続けられた。
イクと同時に意識を飛ばしたのか、ぐったりとするラナーはその口から白濁とした液体を漏れさせていた。
「ラナー様……」

「クライム。最後に良いもの見せてやる」
「良いもの、ですか」
レオンはクライムを手招きして近寄らせると、気を失っているラナーの下着に手を伸ばした。
そしてクロッチの部分を横にズラし、彼女の秘部を晒したのだった。
濡れてテラテラと光り輝く幼い恥裂。
薄く生えた黄金の茂み。
そして僅かに顔を覗かせていた恥ずかしい豆。
それはクライムの脳内に永遠に刻まれる事になった。

青薔薇の受難

王都の中でも特に評判の良い高級宿《黄金の輝き亭》にて４人の女性達がテーブルを囲んでいた。

４人の内、３人は早々お目にかかれないレベルの美女であり、残りの１人も奇妙な仮面を顔に着けているとあって多くの客達の視線を浴びていた。

いや、理由はそれだけではない。

彼女達がこの王国でもトップクラスに位置する冒険者である事も大いに関係あるだろう。

《蒼の薔薇》

それが彼女達のチーム名であった。

王国に２つしか存在しないアダマンタイト級冒険者チームの１つ。

女性だけで構成された彼女達は、男女問わず多くの冒険者達から羨望の眼差しを向けられている。

そんな彼女達は現在、とてもくだらない理由で言い争いをしていた。

「何故あの色欲王子に下着をくれてやらねばならん！」

「だから何度も説明しているでしょ！あの人を敵に回せばいくら私達だってタダでは済まないの。下着を差し出すだけでその危険を減らせるのだから言う事を聞いてちょうだい！」

「ふ、ふざけるな！ラキュースお前はもっとプライドのある人間だと思っていたぞ」

「うっ…貴女は彼に会ったことが無いからそんなことを言えるのよ…」

仮面を着けた少女イビルアイは、リーダーであるラキュースのお願い切って捨てる。

それが当然の反応である事は、ラキュースだって理解していた。

それでも今回に限っては全く伝わらない自分の想いに焦燥感を募らせる。

彼女達が言い争いをしている原因は、何処ぞの変態王子にあった。

彼が以前ラキュースに対して発した「蒼の薔薇全員の下着を用意しろ」というふざけた命令を忠実に実行しようとしている彼女は今こうして仲間達に頼み込んでいるのである。

しかしご覧の通り、仲間達の理解が得られる訳もなく、時間だけが過ぎていく。

これは当然の結果だろう。

商売女でもあるまいし何処に自分の下着を他人に渡す人間がいるのだ。

しかも彼女達はかの名高い蒼の薔薇である。

過去にも愚かな貴族による下卑た命令を受けた事があったが、全て拒否して自らの道

を突き進んで来た。
そんな彼女達だからこそ、多くの平民や冒険者から憧れを持たれているのである。
その筈であるのに今回のリーダーのラキュースの態度は仲間達からすれば違和感だらけで納得のいかないモノだった。
イビルアイの猛反対を受けたラキュースはターゲットを他の2人へと変換する事にした。
「ティナ、ティア貴女達もお願い」
「奴は育ちすぎた」
「美少女になってから出直せ」
「貴女達…」
しかし案の定取り合ってくれる事はない。
いい加減痺れを切らしたイビルアイはダンッとテーブルを叩いて立ち上がった。
「ラキュース！いくら相手が王族だからと言って仲間を売る様なお前ではない筈だろう！――――何があったか話してみろ。まずはそれからだ。」
仲間の強い口調での指摘に、少し冷静になるラキュース。
確かに自分は焦り過ぎていた様だ、と自覚し反省する。
「ごめんなさいイビルアイ。それにティナ、ティア」

「問題ない」
「ボス。本当に何があった」
「そうね…どう話したものかしら…」
　考えをまとめるリーダーを他の3人は静かに待つ。
　少しして、果実水を一口飲んで口を湿らせるとラキュースはゆっくりと話し始めた。
「レオン殿下から貴女達――正確には蒼の薔薇全員の下着を要求された。話はこれだけなんだけど、それじゃあ流石に納得出来ないわよね」
「当然だろう。私が聞きたいのは何故お前がそれを拒否しなかったのかについてだ」
「そうでしょうね」
　数日前レオンに味わわされた恐怖や無力感を思い出し自らの腕を抱くラキュース。
　その時抱いた感情を言葉で伝えるのは容易では無い。
　何度となくその悪い噂を聞き、実際に話したこともあった自分も、あの日直接威圧されて初めて彼の恐ろしさを実感したのだから。
「サシャがリーダーを務める《深緑の風》は知っているわね。少し前にミスリル級に昇格した期待の新鋭チームよ」
「ウチと同じで女だけのチームだな」
「あのリーダーは美人。お近づきになりたい」

それぞれ頭の中で、天真爛漫な少女が率いる美女揃いのチームを思い出す。

ラキュースに関しては何度か指導をつけた可愛い後輩達だった。

「その《深緑の風》だけど、少し前に受けた貴族の護衛依頼で無理矢理、夜の相手をさせられたそうよ」

「バカな……依頼の最中にそんな事を強行すれば冒険者ギルドからの信頼を失うぞ。それに、ミスリル級なら力尽くで拒否すれば相手も手を出せないだろう!?」

「その場にオリハルコン級冒険者並みに強い用心棒がいたらしいわ。ギルドの方にも裏から手を回していたみたいでお咎めなしよ。きっと初めからそのつもりで依頼を出したのね」

「屑が……」

同業の冒険者まで腐敗した貴族の餌食になったと知り、怒りの声を漏らすイビルアイ。

「……それで？なぜ今その話をした？今回のお前の態度とどう関係がある？」

「あの子達がそんな目に合ったのは、彼女達が権力と純粋な暴力で相手の貴族に勝てなかったからよ」

「だろうな。私達ならオリハルコン級冒険者だろうと一瞬でひねり潰せる」

「ええ。つまり私達が今日までそういった被害に遭わずに済んでいるのは、単純に私達

が強かったから。そして積み重ねていた名声のお陰で権力者を牽制出来ていたからよ」
　最高位冒険者だろうと、アインドラ家の令嬢だろうと、それを上回る地位の者はそれなりにいる。
　しかし、王国の英雄として名高い彼女達に手を出せば、敵対する貴族や他の冒険者からの反発によって大きな損害を被る事になるだろう。
「だいたい分かってきたぞ。ラキュース、つまりお前はレオン王子がそんな物を無視出来る程の権力と暴力を持っていると言いたいんだな？」
「そうよ」
　自らの辿り着いた結論の正誤を確認する様に視線を向けるイビルアイに、ラキュースは頷いて返す。
「あの人のお陰で王国の二大派閥は消滅した。表立って彼を非難出来る人間はこの国にはいないわ。そして純粋な力についてだけど――イビルアイ、もしかしたら貴女をも凌ぐかもしれない」
　ラキュースの言葉に全員が息を呑む。
　メンバー以外は知らない事だが、蒼の薔薇で一番の強者はそのイビルアイだ。
　数百年も昔、一国を滅ぼした最強の吸血鬼。
　伝説に語られる魔神をも上回る怪物が彼女の正体なのだから。

その実力はイビルアイを除いた蒼の薔薇全員を同時に相手取っても余裕で勝利を収める程である。

「イビルアイまた負けるの？」

「最強の吸血鬼（笑）」

「お前ら！ぶっ飛ばされたいのか！」

イビルアイがチーム加入時に行った模擬戦の話を持ち出して彼女を揶揄う双子。

それによって暗くなりかけていた空気が少し改善される。

「ふん。ラキュース、お前もだぞ。高々２０年も生きていない人間が私に勝てるとは思えん」

「そ、そうかしら」

「もしあの王子がまたおかしな要求をして来たら私に言え。天狗になったその鼻っ柱を折ってやろう」

そう言って胸を張るイビルアイにラキュースは安心感を覚える。

レオンから感じた強者のオーラがイビルアイを超えてたように感じたが、きっと勘違いだったのだと思いながら。

「頼りにするには貧相な胸だがな」

「!!!!」

しかし、直後に聞こえて来た男の声によって、その安心感は瞬く間に吹き飛ぶ事になった。

「レオン殿下!」

突然自分達のテーブルに現れたレオンに、ラキュースは目を見開く。

それにニヤニヤと笑い返しながら彼は　両手を動かし続ける。

「よう。今日は冒険者らしい格好をしているんだなラキュース」

「城に行く時が特別なんです。その…どうしてここに?」

「それはもち「おい…」なんだ?仮面の女よ」

ラキュースとの会話を楽しんでいたレオンへ、彼の前に座るイビルアイから低い声がかけられる。

自分のセリフを遮られた彼は、しかし機嫌を悪くする事なく、むしろ愉しそうに返事をした。

「『なんだ?』は私のセリフだ、小僧。この手を今すぐ離せ」

そう言うと、先程からずっと自らの胸を揉み続けていたレオンの手を掴む。

しかし、いくら力を入れても彼の手が離れる気配はなかった。

単純な筋力だけなら、ここにいない蒼の薔薇最強の戦士を上回る彼女でさえ引き離せないのだ。

「ふむ。マジックキャスターだと聞いていたが、加えてこれ程の力を持っているとはな。俺の鼻っ柱を折るなどと言うセリフを吐くだけはある」

「くそ……なんなんだ、お前は」

「こんなに近くにこれほどの強者がいたとは驚いたぞ。だが、背後を取られた時点で貴様の負けだ。大人しくするが良い」

立ち上がろうとするイビルアイを左手一本で椅子に押さえ付け、右手を彼女の小さな胸に這わせる。

レオンが現れた瞬間、咄嗟に動こうとした双子の忍者もラキュースに静止され、ただ見ている事しか出来なかった。

この場にいるのは彼らだけではない。

周りのテーブルにいる客達もその様子を困惑した様に眺めている。

イビルアイが発動させていた防音の魔法のお陰で話している言葉こそ聞こえないが、あの蒼の薔薇が、1人の男に怯んだ様に動けず、ウチ1人は胸を弄ばれている事だけは理解できた。

周りの目があっても気にせずセクハラを続けるレオンは、胸を揉んでいた右手を少し

ずつ下げていき、細い腰、臀部、太ももを通って遂にイビルアイの股間へと差し込んだ。
「やめろ……下衆がっ…」
「初めて言われるセリフだな。悔しければもっと反抗してみても良いのだぞ？」
「…出来ないとわかっていて言っているのだろう…」
この段階に至ってイビルアイは自分達がこの変態に為す術がない事を理解していた。
恐らく自分と同等の実力を持つ戦士にこれほど密着されてしまっているのだ。
距離を取っての戦闘であれば負ける気は無いが、現状、ただ堪える事しかできない。
もし一か八かの勝負を挑めば、自分が一瞬で無力化されるだけでなく、それを見て攻撃に踏み込んだ仲間達も酷い目に遭いかねない。
それが出来る実力と権力を持っている事を先程ラキュースから聞いたばかりだ。
「貴様…何が目的だ…？」
「ん？ああ、先程はお前に遮られて言いそびれたのだったな。俺はお前達のコレを見に来たのだ」
そう言いながらイビルアイのスカートの中に手を入れ、タイツ越しに下着を撫でる。
２００年生きてきて一度も異性から触れられたことの無かった場所を触られ、イビルアイは「やめろっ」と言って身じろぎした。
「ラキュースに頼んでいたが、流石に仲間の下着を取ってくるのは大変だろうと思い直

してな？俺直々に足を運んでやったのだ」
「殿下…下着は明日にでもお持ちしますので、どうか仲間を辱めるのはおやめください。他の客も見ています」
そう言って頭を下げるラキュース。
その必死の懇願を受けて少し考えたレオンは、ラキュース、ティナ、ティアの順に顔を見渡すと一つ頷いた。
「身に付けている物を剥ぎ取り、その下の下着を拝むつもりであったが、そこまで頼むのなら勘弁してやろう。自分で脱いで渡すが良い。明日などではなく今この場でな」
勘弁すると言って、それか。
そう胸の中で吐き捨てたラキュースは、これがこの王子の最大限の譲歩だと考え、仕方なく従う事に決めた。
「わかりました。……ティナ、ティア言われた通りにして」
「了解、ボス」
「わかったリーダー」
先程までと違い、レオンの異常さを実際に目にした双子は今度はラキュースに反発する事なく、素直に従った。
２人は防音の魔法を一瞬解除する様にイビルアイにお願いする。

そして確実に魔法の効果が消えた事を確認すると、自分達に視線を向ける客を見回した後、入り口の方を指差して叫んだ。

「何あれ！」

店の中にいた全員がそちらを向く。

その間に常人では見えないスピードでズボンと下着を脱ぎ、再びズボンを履き直す双子。

客達が何もない事に気付いて彼女達に視線を戻す頃には何事もなかったかの様に立っていた2人だが、その手の中には丸められた下着を握っていた。

唯一超人的な動体視力で彼女達のストリップを楽しんだレオンは「双子は下の毛の生え具合までそっくりだな」と感想を述べる。

「脱いだ」

「そうか。少し待ってろ」

ラキュースとの会話や双子のやり取りの間も手を緩める事なくイビルアイの身体を堪能していたレオン。

気付けばイビルアイのタイツは膝の辺りまで下ろされ、彼のその手は下着の中に入り込み、直接彼女の割れ目を弄っていた。

全く耐性のないイビルアイのそこは短い間に「クチュクチュ」と音を立てるほど液体

を分泌している。

「んっ……ま…まだ続けるつもりか…？」

「ここで止めてはお前も辛いだろ？最後までイかせてやる」

「ふっ、ふん…こんな余計な気遣いは…初めてだぞ…っ」

強気に返すイビルアイだったが、性に関して歴戦のレオンの愛撫は彼女にはとても刺激の強いモノであった。

既に限界が近く気力で耐えている状態だった彼女は、次の瞬間、尖り始めていた突起を触られ、呆気なく達してしまった。

ビクンビクンと震えるイビルアイを悲しそうに見つめる仲間達の前で、レオンは彼女の下着をタイツごと脱がし、テーブルに置いた。

そして、双子からも下着を受け取った後、懐からピンクの下着を出してテーブルに並べる。

それが以前渡した自分の物だと気付いたラキュースは頬を染めながら仲間へ視線を向け、自分達のリーダーも既に下着を取られた後だと知って僅かに驚く双子と目があった。

「蒼の薔薇は4人だったかな。これでコンプリートと言うわけだ」

お揃いの、少し透けた黒い下着は双子の物だ。

イビルアイの下着は無地の白い生地で出来ており、一部が濡れて変色している。
レオンはそれらを眺めた後、一枚一枚掲げる様に他の客に見せつけ、本人に返して行った。
そして、最後にイビルアイの仮面の中を覗いた後「面白いモノを見た」という顔をし、その場を去った。
後には羞恥と屈辱に震える蒼の薔薇と、彼女達にいやらしい視線を送る客達が残されていた。

パーティー【前編】

貴族はパーティーを開くものである。
王族が主催の大々的な物から、貴族が身内のみで行う小さな物まで、王都の何処かで毎週の様に開かれている。
華やかな一方で、一晩で平民の一生分の収入を浪費するとも言われる為、貧乏な貴族や民を思い遣る貴族の中には忌避する者も多い。
伯爵家の令嬢ミリアは今夜初めてのパーティーを迎えていた。
ミリアの父は王国では珍しい善良な貴族であり、領内の税を抑えつつ、少ない収入を民の為に使う様な人物であった。
そんな父を誇りに思う一方で、どうしても質素になりがちな生活に不満も抱いていた。
パーティーなど、ドレス代や王都までの移動費を理由にこれまで参加を許してもらえなかったのだ。
しかし、今回ミリア宛に招待状が届き、それも王宮で開催される最大規模の物だった為、父に頼み込んで参加を認めて貰ったのだ。

代わりに数ヶ月先までお小遣いを止められてしまったが、あの美しい王宮に入れるのなら惜しくはない。

「ルーラはもう来ているかしら」

一緒に行こうと約束をしている親友を探し、周りを見回す。

王宮でのパーティーとあって何百という貴族達が集まっていた。

この中から1人を見つけるのは中々に大変だ。

そう思っていたミリアは、しかしその親友からあっさり見つけられ声をかけられた。

「ミリア。ここに居たのね」

「ルーラ！良かった。1人で心細かったんだ」

「ふふっ。初めてのパーティーが王宮でだなんてそりゃ緊張するわよ」

「ルーラはもう何度も参加した事あるのよね？」

「王宮は2回目だけどね。小さな物まで数えたら20は行ったかしら。暗黙のルールなんかもあるから教えてあげるわね」

「ありがとう。お願いするね」

同い歳でありながら自分より多くの事を知っている親友はいつもミリアに様々な事を教えてくれる。

隣同士の領地であり、父達の気も合うことから幼馴染の関係にある彼女はミリアの憧

れでもあった。
「ミリアは挨拶にはまだ行ってないでしょ？」
「挨拶って？」
「こういうのはね、来たら一番に主催者に挨拶に行かなきゃダメなのよ？今回はレオン殿下だから王族の方々がいる前の方に行くわよ」
「ルーラもまだ行ってないの？」
「貴女を1人で行かせられないからね。さ、行きましょ」
親友に手を引かれて歩いて行くミリア。
途中で親友が幾人かの貴族に挨拶をするのに倣って緊張しながら頭を下げる。
「ねえ、どうして挨拶する人としない人がいるの？」
「今のは侯爵様だからよ。私達は伯爵家の人間だから位が下なの。無視したら後々困った事になりかねないのよ」
「そうなんだ」
「ミリアも追々顔とか覚えていきなさい」
「うん」
「ほら、見えて来たわ」
前方の人が多く集まっている一角を指す親友。

更に近づいてみると貴族達に囲まれている2人の美しい男女の姿が見えてきた、
「わあ…綺麗…」
「良かった。今日はラナー王女もいらっしゃるのね」
「あの綺麗な方よね?ラナー王女がいると何か変わるの?」
王都に滅多に訪れる事のないミリアは頭上にはてなマークを浮かべながら訊ねる。
それを見て呆れた様に溜息を吐きながらルーラは説明する。
「あのレオン殿下は余り良くない噂があるの。貴族の令嬢を無理やり部屋に連れ込んだ、とかね」
「えっ……そ、そうなんだ…」
「でもラナー王女を溺愛している事でも有名でね。王女の前ではそういった事をしないらしいわ」
「そうなのね。良かったぁ…」
あからさまにホッとするミリアにルーラはクスクスと笑う。
自意識過剰にも見えるミリアの反応だが、ラナー王女が居なければ危なかったかもしれないとルーラは考えていた。
北方の珍しい黒髪をしたミリアは、ラナー王女には及ばないとは言えかなり整った容姿をしている。

それでいて本人は世間知らずである為、ルーラは気が気では無かった。
殿下の心配は無くなったが彼女を口説き落としてその花を摘み取ろうとする貴族もきっといる筈だ。
なんとしても無事に屋敷へと帰らせようとルーラは密かに決意する。
「次の者、来るが良い」
「はい」
2人で話し込んでいる内に前にいた貴族達の挨拶は終わった様でミリア達の番になった。
先に進むルーラに着いて行くと不慣れなカーテシーを披露する。
「ほう。麗しい蝶が二羽も現れたな」
美貌の王子からのその言葉に顔を赤くしてしまうミリア。
その様子を可笑しそうに見つめたレオンは、2人の挨拶を聞いた後に1つお願いがあると言ってきた。
「お願い…ですか？」
「ああ。実は今日ちょっとしたイベントがあってな。その手伝いを頼みたい」
「わ、わかりました。何をしたら宜しいのでしょう」
「始まる時に呼ぶから出て来てくれれば良い」

内容は告げずにそう指示するレオンに、噂もあって警戒感を持つルーラ。
しかし王族の頼みを断れる筈もなくミリアと揃って了承する。
「パーティーをしっかりと楽しむが良い」と笑顔を向けるレオンに一礼すると、２人はその場を離れていった。

「イベントって何かしらね」
「レオン殿下のやる事だから碌な物ではないわ」
「優しそうな方だったけど？」
「隣にラナー王女が居たからでしょ。まあ、考えても仕方ないし、とりあえずパーティーを楽しみましょう」
「うん」
それからダンスや食事、他の令嬢との交流を楽しんだミリア達は、しばらくして、ついにレオンに呼ばれ、会場の前方へと出て行った。

☆

「これより特別イベントとして俺の妹である第三王女ラナーの公開処女貫通式を行う」
ミリアとルーラを含めた６人の令嬢達がレオンの側に集められると、彼は高らかにそ

う宣言した。

最初、その内容が理解出来なかったミリアは、隣に立つルーラの方を向き「どういうこと?」と訊ねる。

ミリア同様混乱した様子でありながら「嫌な事になったわ」と苦い顔をした彼女はどこか諦めた雰囲気で息を吐く。

「レオン殿下が溺愛していたラナー王女の前で自らを取り繕う事をやめた。それだけで十分よ」

「えっと…」

「処女貫通式とやらがあるなら、この場に呼ばれた私達も似た様な目に合うのは間違いないわ」

「似た様な目って……」

「ミリア。何があっても受け入れなさい。いいわね?」

最後にそう念を押すとレオンの目を気にしてか、ルーラは前を向き会話を打ち切った。

尚も混乱が収まる様子のないミリアは、他の令嬢達へと視線を向ける。

彼女達もルーラ同様レオンの噂を良く知っていた為、ある者は震え、ある者は涙ぐみながらも皆諦めた様にただその時を待っていた。

ザワザワとした貴族達の反応が収まりきらない間にレオンは更に続けて発言をする。
「ラナーは《王国の黄金》と近隣諸国まで知られる美貌の姫だ。その純潔を王国の次期国王である俺が散らす事に異論のある者はいないだろう」
「も、勿論ですとも」
ある1人の初老の公爵が皆を代表して声を発する。
あわよくばラナーを自分の息子のモノに、と考えていた彼だがレオンが望んだ以上それは不可能であろうと即座に判断した。
同じ様にレオンのその発言に不満を抱く男性貴族は多くいたが誰一人表に出す事なく、さも「当然です」と言った表情で頷いている。
「うむ。だが、俺はこうも思ったのだ『俺1人がその楽しみを独占して良いものか』とな。故に今回、この様な機会を設けて、ラナーが女になる瞬間を皆と分かち合う事にした」
数少ない令嬢達は女性の初めてを見世物にするという発言に嫌悪感を抱いた。
しかし大多数の男性貴族は最高のショーへの期待に色めき立つ。
一部の大貴族を除き、多くの男性にとってラナー王女とは雲の上の存在であり、決して手に入らない高嶺の花であった。
そのラナーの処女貫通式だ。
男であるなら興奮してしまうのも仕方がないだろう。

貴族達の様子を眺めて「うむ」と一つ頷いたレオンは続いてミリア達6人の娘へと視線を移した。

「この6人の姫達は今回、ラナーと共に肉棒で貫かれる姿を皆に晒し、ショーを盛り上げる事を了承してくれた」

「そんな事了承してない！」と内心で叫びながら、ミリアはあまりの恐怖に身体を震えさせる。

幾ら鈍い彼女でもしっかりと言葉にされれば自分に訪れる未来を想像出来た。

ルーラ達はとっくにこうなる事を分かっていたのだろう。

レオンの言葉を聞いても大して動揺はなく「やっぱり…」と小さく呟くのみだった。

観客達も彼女達の様子を見て、この状況を不本意に思っている事は理解していた。

しかし、それを指摘する者などおらず、ただ同情の視線を向けたり、むしろ興奮を高めていたりした。

主催者席から立ち上がり、ミリア達の集団に加わったラナー王女は彼女達に向かって謝罪を口にする。

「すみません皆さん。私が『1人では怖い』とお兄様に言ってしまったばかりに貴女方を巻き込んでしまいました」

その言葉を聞き、僅かにラナーに対する怒りの感情を覚えるミリアだったが、彼女の

辛そうな表情を見てすぐに霧散する。
彼女も自分と同じ被害者だと理解したのだ。
他の令嬢達も「ラナー様は何も悪くありませんわ」「お気になさらないで下さい」と優しく声を掛ける。
それで少しは心が軽くなったのか「…ありがとうございます」と微笑むラナーはとても儚く見え、同性であるミリアでさえ一瞬見惚れてしまった。
「これじゃ私達は完全に引き立て役になるわね」
そう述べたルーラに全員が頷く。
容姿は勿論、気品さ、立ち振る舞い等全てにおいて自分を上回るラナーに、ミリアは敗北感を抱いた。
ラナー王女と話している間にも準備は進められていた様で、いつの間にか6人のメイド達がレオンの近くに集まっていた。
彼女達はレオンの命令ならばどんな内容でも忠実に遂行する事で有名な彼の専属メイド達である。
色欲王子と呼ばれるレオンでも流石に何人もの相手を同時にこなすのは不可能だ。
彼女達メイドは、所謂サポート要員として連れて来られたのであった。
皆、感情を表に出さないクールな表情をしており、これから行う事を『仕事』として

認識している事が伺えた。
　そのうちの1人を見た瞬間、ルーラは「あっ」と声を漏らす。
「ソフィア……なんで貴族のアイツがメイドなんてやってるのよ…」
「ルーラ知り合い？」
「お父様と敵対している貴族の娘よ。昔はパーティーで顔を合わせる度に揉めていたわ」
　苦手な人物を見つけて苦い表情を浮かべるルーラに、ミリアは同情を抱く。
　その後レオンから「適当な娘に1人ずつ付くが良い」と指示が出されると、案の定ルーラの元にはそのメイド――ソフィアが近付いてきた。
「お久しぶりですね、ルーラ様。まさかこの様な場でお会いするとは」
「何気持ちの悪い話し方をしているのよ」
「クスッ…。今はレオン様のメイドですので。それにしても美しくなられましたね」
「嫌味のつもりかしら」
「いえ。ただ、貴女の様な美しいお嬢様をこれから好きに出来ると思うと、少しワクワクしてしまいます」
「……アンタ中身は変わってないわね。…本当に、なんでアンタなのよ…」
　ミリアが見たことも無い冷たい目を向けるルーラに、ソフィアは楽しそうに話し掛け

ていた。
　タダでさえ大勢の前で犯されるという屈辱を味わうのに、その相手が過去に争っていたライバルだなんて可哀想過ぎる。
「貴女の相手は私が勤めさせて頂きますね」
　ミリアの元に来たのは２０歳くらいの容姿の整ったメイドだった。
　挨拶だけ済ませるとミリアに興味無さそうに目を閉じてその場に直立する。
　それは彼女に限った事ではなく、ソフィアを除いた全てのメイド達に言える事だった。
　別に自分が辱められる姿を多くの人に見られたい訳ではないが、それでも義務的に接するメイドに、納得のいかない気持ちを抱いてしまう。

☆

「では始めようか」
　レオンのその言葉を皮切りに、メイド達が行動を開始する。
　ある者は令嬢のドレスの中に手を入れ、ある者はその唇をいきなり奪った。
　隣ではソフィアに胸を弄られ「くっ…この変態」と悔しそうに呟く親友がいた。
「あっ……」

ミリアは自分のドレスが捲り上げられていくのを、ただ見つめる事しか出来なかった。

自分の脚が少しずつ晒されていき、最後にはその付け根にある純白の下着が観客の目に触れる。

なけなしのお小遣いで購入した飾りの少ないそれは、18歳のミリアが身に着けるには幼いデザインであり、それを自覚している彼女は羞恥に顔を染める。

ミリアに続いて、ラナー王女のドレスを捲り、薄いピンクの下着を晒したレオンは、メイド達に「お前達もドレスを捲り上げろ」と命令する。

すぐにそれに従ったメイド達によって、令嬢達の秘すべき布が公開される。

「いやっ…やめなさいっ…!」

「ふふっ。とても可愛いですよルーラ様」

「くっ……ソフィア…覚えてなさいよ…」

「あら?もう濡れきていますね。そんなに私の指は気持ちよかったですか?」

隣から切羽詰まった親友の声が聞こえて、そちらを見ると下着の上から割れ目の辺りを弄られている彼女の姿が目に入った。

手慣れた様子で刺激を与えるソフィアによって、彼女のブルーの下着には小さな染みが出来上がっていた。

「私達もアレをしましょうか」
「あっ……」
ミリアにも愛撫を始めたメイドに倣い、レオンを含めた全員が、相方の令嬢の秘部に手を這わせる。
そしてしばらくの時間、布と指が擦れる音だけが響いた。
観客の視線を最も集めているのは当然ラナー王女だった。
純真無垢を体現した様な美しい王女のあられもない姿は、この場の殆どの男達が妄想した経験があるに違いない。
そんな彼女が、下着を晒し、その中心を擦られて頬を染めているのだ。
性的な事とは無縁そう彼女が次第にその下着を濡らしていき、クチュクチュと卑猥な音を立て始める姿は枯れ始めていた老齢の紳士でさえ股間の一物を固くしてしまう程のものだった。
2番目に視線を集めているのはルーラだろう。
最初、強気な発言が目立った彼女が、愛撫に耐えられなくなり遂にはその口から甘い喘ぎ声を漏らし始めると、会場の男達は一気に色めきだった。
ソフィアの積極性も視線を集める理由の一つだ。
他のメイド達がまだ下着の上から陰部に触れているのに対し、彼女は既に前後から手

を下着の中に突っ込み、二つの穴を同時に責めたてている。
嫌いな女の手で前の穴をズボズボと犯され、後ろの穴を大勢の前で開拓される屈辱にルーラは震えた。
僅かに嘲笑した雰囲気で「指がふやけてしまいそうです、ルーラ様」「クリトリスが勃起してきましたよルーラ様」と繰り返し羞恥心を煽られ、そして悔しい事にその言葉によって性的興奮を高められている事実に、ルーラは知らず知らず涙を流していた。
いつも敵対し、何度も苦汁を舐めさせられてきた女が、自分によって悶えさせられ、泣き始めた事にソフィアは内心歓喜し、より一層強く彼女を責め立てる。
その隣ではミリアもエッチな蜜を垂らしながら目を潤ませていた。
アレほど抱かれる事に恐怖していた身体はすっかり溶かされてしまい、男の肉棒を受け入れる準備が整っていた。
そして遂にレオンによって「パンツを脱がせてやれ」と指示が出されると皆一斉に下着を下げられてしまった。
同時に露わになった7つの花園に観客は盛り上がる。
珍しい黒色の茂みを晒すミリア。
最も濡れそぼった栗色の茂みを晒すルーラ。
そして、照明に照らされキラキラと光り輝く黄金の茂みを晒すラナー王女。

その他、４人の令嬢が陰毛とその下の割れ目を露出させられた。

パーティー【後編】

『ねえクライム』
『何でしょうかラナー様』
『もしお兄様に汚されても私を見捨てないでくれる？』
『当然です！私は何があってもラナー様の騎士でございます！』
『そう――良かったわ』

そんな会話があった事をクライムはもう遠い昔の様に感じていた。
レオンの部屋でラナーの痴態を目撃したあの日から、毎日の様に兄王子に呼び出されている主人を、ただ見守る事しか出来ない自分は何の為に彼女の騎士をしているのだろうか。
いや『見守る』などと言う言葉を使うことすら烏滸がましいか。
自分は主人の羞恥心や苦しみを高める為の道具としてレオンに利用されているのだから。
レオンの肉棒に口淫で奉仕する時にも、彼の指ではしたなく乱れている時にもラナー

はクライムに言っていた。

『お願い……見ないで』と。

「やめて」でも「助けて」でもなく『見ないで』。

1番にその言葉が出て来るほどに自分に見られる事はラナーにとって耐え難い苦痛なのだろう。

しかし、それを理解しているあの性格の悪い王子は、情事の際にクライムを常に同席させ、時にはすぐ側での観察を強要してきた。

少し前まで、妄想の中でしか見た事のなかったラナーの裸を、今のクライムは隅々まで知っている。

胸の頂きにある乳首の色から下の毛の生え具合、その奥に隠れた恥豆の大きさは勿論、どう触れれば彼女が悦び蜜を垂らすのか、達する時にどんな声を出すのかまで全てを知ってしまった。

それでありながら、レオンのいない時にはこれまでと同様明るく振る舞おうとする健気な主人は、正直、直視する事が出来ない程痛々しかった。

いや、彼女の変わらない姿にそんな感情を抱いてしまうと言うことは、変わってしまったのは彼女を見る自分の目の方なのだろう。

今も変わらず無垢で優しいままの彼女を、クライムは『性に堕ちる憐れな王女』とし

か思えないのだから。

☆

――ただ待機して見ていろ。

それがクライムがこの巫山戯たショーが始まる前にレオンより下された命令である。

彼の前では自分の大切な王女が大勢の男達にその下半身の最も秘すべき場所を晒していた。

一歩離れた位置にいるクライムには、男達の視線が彼女のある一点に集中しているのがわかり、激しい怒りの感情が湧き上がる。

「なんとも柔らかそうな恥毛だな。一瞬でも良いから触ってみたいものだ」

「ですな。天使の如きラナー王女にもしっかり生えているとは。これは良い物を見ました」

「いや、それよりも、はしたなくヨダレを垂らしている割れ目だろう」

「その通り！ほら見たまえ。今も儂等を誘う様にプルプル震えておる」

「あの柔らかそうなオマンコに俺の一物を咥えさせてやりたいわい」

好き放題にラナーの秘部について評価をし始める貴族達。

彼等の声は当然ラナー本人にも聞こえている。
レオン以外から初めて注がれる欲望に染まった視線に、このか弱い王女は肩を震わせ必死に顔を隠そうとしていた。
他の令嬢達も同様である。
「肌を見せるのは伴侶となる男性にだけ」だと教えられて来た彼女達にとって、この残酷な仕打ちはとても許容出来る物ではなかった。
涙を流し、顔をうつむかせて必死に堪える彼女達にクライムは同情する。
しかし同時に、どうしても抱いてしまう思いがあった。

――なぜ、愛するラナー王女が他の令嬢と並べられて辱めを受けなければならないのか

と言うものである。
ラナーの陰毛と隣の令嬢の陰毛を見比べて「ラナー王女の毛は少し薄い様だな」とニヤつく太った中年貴族がいた。
全員の姿を見渡し「何とも壮観な眺めだ」と、あろう事かラナーを景色の一部、7人のうちの1人として捉えている愚かな老貴族がいた。

「全員の穴を順番に犯せたら死んでもいい」とのたまう生きる価値のない若い貴族がいた。

この国で最高の女性であるラナー王女を、この人達は何だと思っているのだろうか、とクライムは強い憤りを感じていた。

レオン王子が決めた以上、ラナーの処女喪失は確定している。

しかし、せめて彼女の初めてはもっと特別視されながら散らされるべきではないのか。

これではラナーは他の令嬢達と同様、憐れな7人の内の1人に成り果ててしまう。

自分が決して手に入れる事が出来ないラナーの身体は、レオンにとってはもしかすると大した価値のない物に過ぎないのではないか。

クライムのその疑念を肯定する様に、レオンはラナーから離れるとメイド達に押さえられた令嬢達の下半身へと手を伸ばした。

端から順番に令嬢達の陰毛を撫でていくレオンは、全員の毛を触り終わると、今度は彼女達の割れ目をなぞっていく。

両手で2人を同時に愛撫して行った彼は、最後に黒髪の令嬢とラナーの肉壺に指を当て、激しく振動させる。

《黄金の姫》として特別視していたラナーが、他の令嬢と共に「クチュクチュ」と卑猥

な音を響かせながら果てる姿を見てクライムは彼女に抱いていた幻想が砕ける音を聞いた。

色眼鏡を無くして見れば彼女も他の令嬢と変わらない1人の少女に過ぎないと言うことをクライムは今更ながら認識したのだった。

「よし。皆よく濡れているな。見た所処女ばかりの様だがこれなら問題なく入るだろ」

レオンは愛液で濡れた指をラナーのスカートで拭うと、ラナーの後ろに控えていたクライムを呼ぶ。

「クライム。俺の代わりにラナーのスカートを押さえていろ」

「わ、わかりました」

驚きながら主人に近づくと、落ちかけていたスカートを掴み、少し上に引っ張る。

レオンに命令されたからとは言え、触れる事さえ恐れ多く感じていたラナーの身体に密着し、そのスカートを捲っている状況にも特に抵抗を覚える事はなかった。

会場全体のラナー達7人を軽視する空気にいつの間にかクライムも当てられてしまった様だった。

僅かに震える小さな少女は、背後を振り返り「…クライム?」と弱々しく彼の名前を呼ぶ。

「すみませんラナー様。命令…ですので」

「う、うん。わかっているから気にしないで」
「はい…すみません」
「…いいのよ。嫌な役させてごめんなさい」
こんな状況にありながら、クライムを気にかける優しい王女は彼の胸板に寄りかかる様に背中を預ける。
自分への信頼を示すその行動に、嬉しさを感じるクライムだが、その股間は大きく膨らんでおり、結果的にラナーの小さなお尻に、その肉棒を押し付ける形になってしまった。
更に、密着した事で肩越しに彼女の晒された下半身を見ることが出来るようになった。
上から見下ろす事で立体的に見える茂みには、愛液の雫が付着しており、一層卑猥に見える。
角度的にその下の恥裂こそ見えなかったが、足首まで下げられた下着の内側が目に入り、一物を更に硬くする。
幸い鎧か何かと思っているらしいラナーは、何の反応も示さず、それを良いことにクライムは彼女のお尻に一物を押し込んで密かに征服感を得ていた。

☆

「脚を開いて腰を突き出すが良い」
それが次にレオンが発した命令だった。
しかし、誰1人と自発的にその様なポーズをしようとする令嬢はいない。
そこで、あるメイドが嫌がる令嬢の太ももを掴み、無理矢理開かせた。
それを皮切りにメイド達は、淡々と令嬢達の脚を開かせていく。
そして、直ぐにラナーを除く6人の娘達はガニ股で自らの秘部を見せ付ける様な格好を強要されてしまった。
「ラナー様…脚を」
「…ご、ごめんなさい、クライム。…あんな格好出来ないわ」
「みんながラナー様を待っています」
「ううっ……」
イヤイヤと首を振って拒否するラナーを、会場にいる全員が注目していた。
そして、彼女が言われた態勢を取る気が無いことがわかると、その背後に立つクライムへと「お前が開かせろ」という無言の圧力を送り始める。
視界の端で苛立った様にラナーを眺めるレオンを捉えると、クライムは覚悟を決めて

ラナーの下半身へと手を伸ばした。
「失礼しますラナー様」
「あっ、ダメ…」
ラナーの弱々しい抵抗を無視して、彼女の閉じられた太ももの間に手を差し込む。
スベスベとした肌は、割れ目から流れて来た愛液で濡れており、クライムの手を汚した。
クライムが手に力を入れてやるとラナーの脚は少しずつ開いていく。
そして、脚を肩幅まで開かせるとドレス越しに臀部を押して、ラナーに腰を突き出す様な態勢を取らせる。
「これでお前達の処女も見納めだ。最後に中まで良く見てもらえ」というレオンの言葉を受けて、クライムは指をラナーの割れ目へと持っていき、緊張しながら触れた。
そして、ピタリと閉じられた恥肉を優しく花開かせていった。
小さな豆やヨダレを垂らす雌の穴などが観客の目に触れる。
他の令嬢達もメイドの指によってその花園を暴かれていた。
レオンはその景色を堪能すると、ズボンから一物を取り出し、メイド達に「ケツをこちらに向けさせろ」と命令をする。
その通りの態勢を取らされ、尻を並べさせられた令嬢達は隠すことも出来ずに2つの

穴を観客に晒していた。
　レオンはラナーから最も離れた位置にいた令嬢に近づくと後ろから彼女の肉壺に一物を挿入する。
　痛み故かそれとも純潔を奪われた悲しみ故か涙を流す彼女だが、それを一切気にかけることもせず、自分本意に腰を振るレオン。
　しばらくして初めての絶頂を味わった彼女は、その場に崩れ落ちた。
　それをつまらなさそうに眺めたレオンは、直ぐに隣の令嬢へと目標を定めた。
☆
「ぁぁぁぁぁぁ!!嫌ぁぁぁぁ!!」
「あまり叫ぶな、煩いぞ」
「んんんっ～～～!!!」
　隣でルーラが犯されていた。
　いつもの大人びた雰囲気など影もなく、小さな子供の様に泣き叫ぶ親友の姿にミリアの震えは今日最高潮に達する。
　上半身をメイドの脇に固定され、ドレスの捲れた無防備な下半身を多くの人間に見られている事など今の彼女には気にする余裕もなかった。
　ルーラが終われば自分の番だ。

もうすぐ自分は大勢の前で傷物にされてしまう。
その恐怖が彼女の心を満たしていた。
「次はお前か」
そして遂に、王子はミリアの尻の前に移動してきた。
隣に視線を移すと、白濁の液体を大切な場所から流しながら嗚咽をこぼす親友の姿が目に入る。
それが未来の自分の姿だと悟ると、自然と目から涙が溢れ出す。
「いや…いやだよぉ…」
「おい力を抜け」
「お父様ぁ……」
「たくっ…」
レオンは面倒くさそうに彼女の秘部を刺激し、性感を高めてやると、その後ゆっくりと一物を押し込んでいき、腰を振り始めた。

☆

クライムの腰に抱き着く形で白いお尻を突き出したラナーは、背後に立った兄王子に

身体を硬くする。
　６人の令嬢達を犯した筈のレオンの肉棒は、未だ大きくそそり立っており、彼の身体の動きに合わせてラナーの臀部を叩いた。
「さて、前座は終わりだ！諸君！これよりラナーの処女を貫通する」
　レオンは先ず、ラナーの臀部を鷲掴みにすると観客に見せつける様に割り開いた。
　そして、僅かに開いた割れ目に指を入れて具合を確かめる。
　クライムの腹に顔を押し付け、漏れ出る甘い声を必死に殺そうとするラナー。
　しかし次第に激しさを増すレオンの指攻めに屈し、すぐに喘ぎ声を我慢できなくなってしまった。
　自分に抱き着きエッチな声を出すラナーを、クライムは複雑な表情で見守る。
　彼の中にあるのは特等席で彼女の顔を見る事の出来る喜びと、喘がせているのが自分ではないという悔しさであった。
　しばらくして、ビクンビクンと腹に伝わる振動から、主人がイカされた事を知った彼は、不敬と理解しながらもラナーの頬に手を添えて、彼女の顔を上げさせた。
　上目遣いで自分を見上げ、力無く微笑むその顔が、誰にも穢されていない彼女の最後の顔になる。
　頬を流れ落ちる涙を拭う時間さえ惜しんで、クライムはその顔を脳裏に刻み込む。

「ラナー様…ずっと…ずっと…お慕い申し上げております」

「…わたしもよ…クライム…」

ドンっという衝撃と共に一瞬顔を歪めたラナーを見て、彼女の大切なモノが永遠に失われた事を知ったクライムは、前で繰り広げられる地獄を見ない様に目を閉じた。

その後、しばらくの間、激しく揺れる彼女の身体を支えながら、悲しみに包まれた嘆声を聴き続けた。

純潔を失ったラナーはレオンにより抱え上げられ、再度観客によく見える態勢で犯された。

そして、膣内にたっぷりと精液を注ぎ込まれると、会場中から女になった事を祝福されたのだった。

ラナー誤算

パーティーの翌日、レオンは自室にてラナーと向かい合って座っていた。
クライムの姿はここにはない。
傷心を装ったラナーの「今日は1人にさせて…」という願いを聞き、彼女の元を離れている為である。
その話を聞いたレオンは「本当に傷心なのはクライムの方だろう」と内心思っていた。
それでも、その傷心中の筈の主人が、ノコノコと1人で原因の男の部屋を訪れていると知ったならば、何を放り出してでも駆け付けるに違いない。
レオンはメイドに入れさせた紅茶をラナーに勧めると、自分も一口飲んでから口を開いた。
「それで、本当に処女を奪ったが良かったのか？」
「はい。これでクライムの中で私は手の届かない天上の花ではなくなりました」
計画通りに、とラナーは嗤う。
これが昨日「わたしもよ…クライム…」と儚く微笑みながら愛する人と愛を確認し合っていたお姫様であるから恐ろしい。

「好きな男と結ばれる為にその相手の目の前で処女を捨てるなんて理解できないな」
「お兄様と違ってクライムなら穢された私でも愛してくれますから」
昨日被っていた化けの皮をどこかに捨て去って、黒い笑顔を浮かべてレオンと話すラナー。
今の彼女の姿を見たら、あの憐れな少年騎士はどんな顔をするだろうか。
「そういえばお兄様。最初に交わした約束を覚えていますか？」
ひとしきり自らの騎士が如何に可愛いかを語ったラナーは、ふと思い出した風にそう質問した。
笑顔で訊ねる彼女の目は1ミリも笑っておらず、忘れたなどと言わせない、という雰囲気をこれでもかと醸し出していた。
「勿論覚えているとも」
そんな妹に苦笑いを浮かべながらレオンはその約束を口にする。
「お前は処女を俺に差し出し、更に今後内政面で全力を尽くして王国に貢献する、だったな」
自分に都合の良い所までしか述べない兄に呆れながらラナーはその先を付け足す。
「代わりにお兄様は処女を奪ったら二度と私に手を出さず、私とクライムが結ばれる様に全力で支援する、までですよ」

そう。それが2人の目的だった。
レオンからすれば妹の処女は権力にモノを言わせれば簡単に奪える物でしかなかった。
しかしラナーに恨まれたら最期、その頭脳をレオンの為に使ってくれる可能性は失せていただろう。
いくら強制してみても、その悪魔の如き頭脳から繰り出される策によって気付かない内に破滅させられかねない。
帝国を始めとする敵対国家が存在する以上、ラナーの協力は不可欠であった。
その為、レオンは権力を手に入れてからもラナーに手を出す事なく比較的紳士な対応を心掛けていた。
国の繁栄と妹の処女ならば、国の繁栄を優先したという事だ。
しかし、そんな時に持ちかけられたのがこの取引であった。
ラナーに恨まれる事なく彼女を抱く事が出来る。
加えてクライムとの仲の援護など大した負担でもない為、レオンは二つ返事で了承したのである。
一方、ラナーにとってもクライムと結ばれ、共に国を豊かにしていけるとあって、特に不利益はない取引だった。

処女の喪失だって多くの障害を突破する為には寧ろ必要な事であった。
「ちゃんと覚えているのなら良いのです。それでは早速お願いなのですが、クライムに私を抱くように命令して頂けますか?もう今のあの子なら『お兄様の命令』という免罪符さえあれば、私を抱く事も拒否はしないでしょうから」
昨日、さり気なく自分に股間を押し付けていたクライムを思い出し、クスクスと笑うラナー。
しかし、その笑顔は次の瞬間には崩れる事になった。
「いや、断る」
「え?」
「一方的で悪いが、この取引はなかった事にする」
直ぐにでも受け入れてくれると確信していたラナーは、レオンのまさかの拒否に怪訝な表情を浮かべる。
その頭脳をフル回転させて理由を考えてみるが、納得の行く結論は出なかった。
彼女が考えている間に、隣へ移動したレオンはその手をラナーのドレスの中に忍び込ませ、彼女の太ももをイヤらしく撫で回し始める。
「お兄様は私が思っている程賢くはなかった、と言う事でしょうか?」
言外に「拒否して被る事になる被害がわからないの?」と非難するラナー。

彼女には自分を手放すのが惜しくなった兄が後先考えずに発言しているとしか思えなかった。

今も恥部まで到達した彼の指が下着の上を這っている。

「いくら俺が優秀でもお前の助けがなければ王国は、近い内に法国なり帝国なりに滅ぼされるって事くらい理解しているさ」

「ええ。そして私は例え強制されたとしても知恵を貸す気はありません」

「わかっているとも」

自分の正気を疑うラナーを見て、レオンはニタァと悪どい笑みを浮かべた。

「だが、それは過去の話だ。状況が変わったのさ」

ついに下着の中へと入り込んだレオンの指は、純潔を失ったラナーの割れ目を上下に撫で始めた。

レオンは数日前の出来事を思い出す。

突然目の前に現れた自分より遥かに強い男。

スレイン法国の特殊部隊の隊長をしていると言う彼に半ば脅される形で、レオンは法国と同盟を結んだ。

彼らからの命令にある程度従う代わりに、王国は彼の国の庇護下に入る。

それは、人類国家統一を密かに目指していたレオンに取って不本意な選択だった。
しかし、個として最強を自負していた自分を軽く上回る男の存在と、彼から聞いた人類の置かれている現状はレオンに初めての「諦め」を決意させるには充分だった。
「状況が変わった…？」
「ああ。もう他の人類国家は敵ではない。そして人外国家を相手にする時、モノを言うのは単純な武力だけだ。ラナー。最早お前の頭脳を俺は必要としていない」
「！」
ラナーはそこで初めて焦りの感情を露わにする。
情報が少な過ぎて今起きている緊急事態に上手く対応出来ない。
分かるのは兄が本当に自分に価値を感じていないと言うことだけだった。
「頭脳」という唯一にして最強のカードが意味をなさなくなった。
それはつまり、レオンに対抗できる手段が失われた事を意味している。
いつか、彼が考えていた通りだ。
賢いだけのラナーでは、多くを持つレオンには結局及ばないのだと。
「……そんな…いやっ…」
ラナーはその瞬間一つだけ理解した。
クライムとの幸せな未来は、恐らくもう訪れる事はないだろう、と。

絶望を感じ、呆然とするラナーの下着の中では、レオンの指が激しく動いていた。

☆

部屋の中には2人の唇が触れ合う音が響いていた。

レオンは「チュパッ…チュパッ…」と水音をわざと立ててラナーの反応を伺う。

「初めてのキスはクライムに取っておこう」などと可愛い事を考えるラナーではないが、それでも自分がただ奪われるだけの身だと理解した今、残るモノを少しでも守ろうと抵抗を始めた。

しかし、唇を強く結んで顔を背ける彼女にいい加減イラついてきたレオンは、殺気を込めて「抵抗するな」と言い放ち、ラナーを大人しくさせたのだった。

その際、股の間から黄色い液体が流れてきたのを見て、彼女の心が折れかかっている事を理解し、ほくそ笑む。

憐れな小動物の様に、震えながらされるがままになったラナーは、唇を割って侵入してきたレオンの舌に口内を蹂躙された。

小さな舌を必死に逃がそうとするが、すぐに捕まってしまい、絡み合って唾液を啜られる。

身体の方では、キスをしながら服を脱がしていったレオンによって小ぶりな乳房と、ビショビショに濡れたパンツが外気に晒されていた。

トロンと僅かに蕩けた顔で身体を弄ばれる彼女の姿は、今までのどこか演技臭い反応よりずっと情欲を誘った。

最後に残ったパンツも剥ぎ取り、完全に全裸となったラナーの身体をレオンは自分の膝の上に抱える。

そして、向かい合う形でお互いの性器を触れさせると、亀頭からゆっくりと割れ目の中に侵入させていった。

昨日に続く2度目の挿入は大した抵抗もなく進み、ラナーの肉壺を深く深く犯していく。

肉棒を根元まで飲み込んだ穴は、グロテスクに開いていた。

自分の柔らかい肉を押し開いて突き刺さる剛直を、ラナーは悲しげに眺める。

「本当に…挿れてしまったのですね…」

「お前に優しくしてやる理由はもうないからな」

「…これから私は…どうなるのでしょう」

「別に一生縛り付ける気は無いから安心しろ。俺が飽きるまで抱いた後ならクライムの奴にくれてやってもいい」

「飽きるまで…それは一体いつになるのかしら…」

訪れるはずだったクライムとの幸せな未来。

それは兄の突然の心変わりによって脆くも崩れ去った。
身体の中に打ち込まれた、この硬い肉棒はもう自分を逃がすことはないだろう。
「じゃあ、動かすぞ」
「…はい」
尻を掴まれ、ゆっくりと動き始めた肉棒にラナーは身を任せた。
☆
クライムがレオンの私室を訪れたのは、挿入から２０分程してからだった。
その間、ひたすら犯され続けていたラナーは身体中から体液を出し、何度も絶頂させられた。
クライムは傷心中の筈の主人の変わり果てた姿に目を見開く。
「あっ…気持ちいい…おにいさまっ…んああっ…♡」
「可愛い反応する様になったじゃないかラナー」
「は、はい…♡…あっ…私、またイっちゃいます…」
「おうイけ！さっきみたいに大きい声で果てろよ」
「んんあっ…イっちゃう……私…おにいさまのおチンチンで…オマンコ、気持ちよくされてっ……イっちゃいます！」
「くはは。教えた通りだ」

「あああぁっ、んあああああっ♡…イクっ、イっちゃうの…イク…イクぅうううっ!!!!!」

あそこでレオンの上に乗っかり淫らに腰を振る少女は本当にあのラナー王女なのか!?

どれだけ穢されても心は清いままだった彼女が、自分から兄に抱き着き、決して言わない様な台詞を大声で叫んでいる。

自分がいない間に何があったのか、とクライムは呆然と見ていた。

それは「これまでの企みをクライムに暴露されたくなかったら淫らに乱れる演技をしろ」とラナーが強要されているだけであり、別に彼女が短時間で墜とされたなどと言う事実はない。

命令されるままに喘ぎ声をあげるという屈辱を受けてでも、クライムには最後まで自分の本性は知られたくなかったのだ。

しかし、そんな事を知らずにただその光景を見せつけられたクライムは、愛する彼女が、兄王子によって完全に躾けられてしまったのだと判断してしまった。

今もレオンとついでにその後ろにいるクライムに見せつける様に、白いお尻を振りながら兄の一物を舐めているラナーの心の中には、激しい憎悪と羞恥の感情が溢れている。

だから、レオンの顔の前に差し出す形になった2つの穴を弄られ、エッチな声を出している彼女の顔も酷いものである。

偶然見える位置から目撃してしまったメイド達は「恐ろしいものを見た」という表情をし慌てて目を逸らした。
「遅かったなクライム」
「何が…あったのですか…ラナー様が、あんな…」
「ん？ただ犯し続けただけだ。ククク。最初は泣き喚きながら必死に抵抗してたのによ、チンコ突っ込んでやったらこのザマだ。なーにが《清く美しい王国の黄金姫》だ。ただの淫乱だったぜ」
レオンはクライムの反応を楽しむ様に有る事無い事語っていく。
「なあクライム。ケツの穴を弄られて善がる王女ってどう思う？流石に失望するか？」
「…いえ、仕方のない事…かと」
「ふーん。あ、そうそう。４８回だ」
「…？何がでしょか」
「ラナーがお前の名前を呼んだ回数だ」
「！」
ラナーの姿を見ない様にうつむき気味だったクライムの顔が、一気にレオンに向けられる。
「愛されてるなお前。『クライム助けて』『ごめんなさい…クライム』と何度も呼ばれてた

ぞ」

「ラナー…さま…」

「まあ、最後には『お兄様』としか言わなくなったけどな！」

そう言うと、笑いながらラナーへの愛撫を再開したレオン。

それに合わせて「んあっ…お兄様っ…」と彼女は嬉しそうに身体を震わせた。

自分がいる事にも気付かずに兄から与えられる快楽に身を任せるラナーの姿に、クライムは顔を歪めて悲しみを飲み込む。

その目は花開いた彼女の割れ目へと釘付けになっており、硬くなった一物はズボンを突き破らんばかりに膨らんでいた。

その後、ラナーがクライムの姿を見つけ、悲鳴を上げながら正気を取り戻した時には、既に5度、膣内に精液を注がれた後だった。

クライムの胸に抱き着き、泣きながら「今見たものは忘れて…」と懇願する主人を彼は優しく包み込んだ。

それを面白くなさそうに眺めたレオンは、しかし、ある確信もあって2人の邪魔をする事なく部屋を出て行った。

数日後、ラナーの懐妊の知らせが王城を駆け巡り、ある騎士を絶望のどん底へと叩き

落とした。

教会での悲劇

スレイン法国特殊部隊・漆黒聖典の第四席《神聖呪歌》と呼ばれる女性は元々は教会に所属する聖女であった。

類稀なる魔法の才能と教会によるバックアップが合わさったお陰で英雄の領域にまで踏み込んでいた彼女は、接触してきた法国のスカウトの誘いに乗り、彼(か)の国へと所属する事となった。

そんな経緯もあって、人類生存の為に日々任務をこなす傍ら、教会に足を運び神への祈りを捧げる事を習慣としていた。

その日も任務で王国を訪れていた彼女は、王都の教会を訪ねていた。

常駐している神官に許可を貰い、礼拝堂に入って膝をつく。

美しい所作で行われるその祈りは、彼女の浮世離れした容姿と合わさり、とても神聖なモノに見えた。

しばらくの間、その場にいた全員が物音1つ立てずに彼女に見惚れる。

彼女が元聖女である事を知る者はここにはいない。

漆黒聖典は秘匿された特殊部隊である。

メンバーの顔が知られるのは望ましくなかった。
その為、この裏の世界に踏み込んだ際に、彼女の事を知る人間は全員記憶を消されていた。
それでもこの場にいる誰もが彼女を尊い存在であると確信し、その祈りの邪魔にならないよう心掛けていた。
神聖呪歌が閉じていた眼を開け、立ち上がった時、教会がにわかに騒がしくなる。
何事かと入り口に視線をやった彼女は、そこに立つ一人の男に気が付いた。
「アレはレオン王子ね」
「どうしてここに…？」
「貴女知らないの？偶にここのシスター達を抱きに来るのよ」
「なんて罰当たりな…っ」
近くで小声で話す女性達の会話を聞き、その男の正体を知る。
王子でありながら、王国と帝国との戦争で、帝国四騎士の1人を討ち取り、その後行われたガゼフ・ストロノーフとの御前試合で勝利した事から周辺諸国最強との呼び声高い戦士。
水明聖典の調査では既に英雄の領域に踏み込んでいるとの結論が出されている。
そして同時に権力を盾にした悪行の数々についても彼女の耳に入っていた。

「おい神父。ここに俺が抱いていないシスターはあと何人いるんだ?」
「お、恐れながら殿下。先月お相手しましたアリシアが最後の1人でして…」
「ん?ああ、そうだった。妙齢の女は全員抱いたからとシスター見習いのガキンチョを犯してやったんだったな」
「え、ええ…」
「それにしても清い身体のシスターが1人もいないとは、神も嘆いているだろう」
あまりにも惨い会話に神聖呪歌はその美しい顔を顰める。
何人かの男性客はシスター達に無遠慮な視線を向け、彼女達を更に居た堪れない気持ちにさせた。
元は教会に所属する身だった神聖呪歌には、純潔を無くした彼女達の悲しみが痛いほどわかった。
神父がレオンの相手をしている内に、女性客は巻き込まれまい、と教会を後にする。
後には教会の関係者とレオン、そして神聖呪歌のみが残された。
そうなると必然、人の中に紛れていた神聖呪歌の整った容姿がレオンの目に触れる事になる。
「なんだ美しい女がいるじゃないか。決めた。お前が俺の相手をしろ」
「彼女はこの教会の者ではありませんが…」

「俺は今日、穢れない女を抱きたい気分なのだ。お前達が用意出来ないのなら、客が代わりに奉仕するのも仕方のない事だろう。どちらにせよ俺の国にいる以上、あの女も俺の物であるしな」

何という暴論。

彼の働きによって犯罪行為が激減し、王国は比較的マトモになったと言う報告があったが、この様な蛮行が許されているとなると、再調査が必要かもしれない。そう神聖呪歌は心の中で判断する。

「先程から好き勝手言われていますが、私はスレイン法国の人間。貴方のその下らない命令に従う義理はありませんよ」

神聖呪歌の言葉にレオンは僅かに顔を顰める。

流石の彼でも人類最強の国家の名を出されると警戒してしまう。

高価そうな服やその立ち振る舞いから、それなりの立場の人間であると考えられる彼女に、正当な理由もなく手を出せば後々面倒くさい事になりかねない。

しかし「はいそうですか」と諦めるには彼女はあまりにも魅力的に映った。

神聖な雰囲気を醸し出す法衣は胸のあたりが大きく膨らみ、厳かな中にも性を意識させる。

貴族令嬢とはまた違った侵し難い空気を身に纏う彼女は、レオンの好みど真ん中で

あった。
「……お前が本当に法国の人間である証拠はない。他国の要人であると嘘を吐いて俺から逃れようとする女は過去にもいたしな」
「一国の王子がその様な危険を冒すのですか？」
「もし本当だとしても、いくら最強国家である法国とはいえ、たかが1人の女の為に俺とやり合う可能性はないだろう？個として勇名を馳せる戦士のいない法国では俺1人にかなりの損害を出す事になるしな」
「……そうですか」
どうあっても自分を見逃す気が無いと理解し、神聖呪歌は溜息を吐く。
それにしても漆黒聖典の自分の前で『個として勇名を馳せる戦士がいない』とのたまうとは。
無知から来るその台詞に彼女は思わず笑いが出そうになってしまった。
「幾ら英雄級とは言っても所詮は温室育ち。日々人外の化け物達と戦っている私には及ばないでしょう」
「あん？何を言っている」
「ああいえ、此方の話です。それで話を戻しますが、貴方の相手をしろ、でしたね」
「そうだ。受ける気になったか？」

「そうですね――」

彼女は話しながら魔法を発動させる。

瞬間、レオンの周りに光の渦が発生し彼の動きと視界を阻害する。

「――答えは『お断りします』です」

《光の領域・全域／ライトフィールド・オール》

第五位階に分類される彼女のオリジナル魔法は、同じ漆黒聖典のメンバーでさえ抜け出すのにそれなりの時間を要す。

その間に光の槍を発現させ、敵を貫くのが彼女の必勝パターンだ。

「貴方はまだ使えるので殺しはしません。ですので、自分より強者がいる事を忘れず、今後は少しは慎みを持って生きなさい」

そう告げると、四方から光の槍がレオンに降り注ぐ。

視界を覆う眩い光に、その場にいた神父達は目を閉じた。

次に目を開けた時、きっと重傷を負って倒れている自国の王子の姿を見る事になるだ

ろうと確信しながら。

しかし、恐る恐る目を開いた彼らは、そこで予想と異なる光景を目の当たりにする。

「ばか…な…」

「威力的に第五位階の魔法か？中々やるじゃないか」

「なぜ…傷一つないのですか……？」

光の中から変わらない姿を現したレオンに、神聖呪歌は眼を見開いて驚く。

無傷。重傷どころかかすり傷一つ負っていないレオンは、余裕の表情を崩さず彼女の方へと近付いて行く。

「さっき『英雄級』とか言っていたが俺の事だろ？確か難度９０くらいの奴を表す言葉だな」

確認する様に訊ねると彼は続ける。

「残念ながら俺の難度は１５０相当らしいぞ。お前が俺を英雄級と判断して攻撃して来たのなら当てが外れたな」

その言葉に驚愕を露わにする神聖呪歌の目の前に立つと、レオンはその豊かな胸に手を伸ばした。

「……くっ…」

「立場が分かったか？ならば抵抗する事なく俺に抱かれろ」

神聖呪歌の難度はせいぜい１００程度。
レオンが自分では逆立ちしても敵わない存在だと理解した彼女は、自らの胸を無遠慮に揉みしだく彼の手を、ただ受け入れるしかなかった。

☆

服の胸の部分を無理やり破られ、胸を露出させられた彼女は、頂きにある突起を指で挟まれて弄ばれていた。
教会を離れたとはいえ変わらず神に捧げていた身体を、その神の面前で好き放題に触られている。
レオンの指が乳首を引っ張る度に彼女は自分の身体が汚れていく感覚を覚えていた。
「ここまで形の良い胸は見たことがない。毎日神とやらを想ってオナニーしているのか？」
「あっ、くぅ……神への冒涜ですよ…」
「こんなに勃たせといて何言ってるんだ」
「んっ……言わないで…下さい…」
レオンの言う通り、彼女の乳首は始めに比べて大きさを増していた。

そこを触られ、嫌でも性感を高められた彼女は、頬を染めてモゾモゾと足を擦り合わせる。

「下の方はどうだろうな」

「……ぁ…」

膝上までしかない短いスカートの下へと入り込んだレオンの手は、太腿を撫で回しながら、その上の付け根まで辿り着く。

そして、そこにある恥裂を下着の上から撫で上げた。

「あ……や、やめて下…さい…」

初めて他人に触られ、ピクンと下半身が跳ねる。

その反動でレオンの指が陰部に強く押し当てられてしまい、思わずエッチな声が漏れてしまった。

慌てて自分のアソコを上下に擦るレオンの指を両手で掴み、止めようとする。

しかし、レオンは逆にその手を掴み、彼女の指を秘裂に這わせた。

「あ、やめ……これ、やめて下さいっ…」

「くはは。慣れてる自分の指の方が気持ちいいだろ?」

自分の指で割れ目を弄る形になった彼女は、沸き上がる羞恥心に激しく身動ぎする。

それを力で無理やり押さえ込み、レオンは彼女の指を何度も動かした。

神聖な雰囲気の女性が、オナニーを強制される姿は聖職者でさえ邪(よこしま)な気持ちにさせる程背徳的で、その姿を見ていた神父達は自分の股間が硬くなるのを我慢出来なかった。
数分後、甘い喘ぎ声を漏らし始めた神聖呪歌は、レオンの指が既に離されていることにも気付かず、自分の敏感な所に指を這わせる。
下着の中から溢れてきた液体で彼女の指はベタベタに濡れていた。
レオンは彼女の胸を両手で包むように揉みながら、自慰に耽る姿を楽しんでいた。
彼女の顔を覗き込めば、唇は物欲しそうに小さく開き、目はトロンと潤んでいる。
我慢出来ずにレオンはその唇に自分のモノを重ね合わせた。
神聖呪歌はそれを拒絶するどころか無意識に舌を絡ませ、そしてそこで正気に戻ったように顔を逸らした。
「なっ……なっ…今のは、ちがっ…」
「フッ。随分夢中になっていたな。もしかしてオナニーしたこと無いのか？」
「……私は神に仕える身ですから…」
「なるほどな」
教会に所属する者にとって自慰はとてもはしたない行為だ。
だが、そうは言っても殆どの人間は隠れてこっそり行っている。
しかし、どうやらこの美しい女性は真面目にも教えを守り続け、成人した現在でも性

の発散を行なったことがないらしい。
つまり彼女は、オナニーをしたことも無い状態で、百戦錬磨のレオンの愛撫を受けたのだ。
我を忘れて暴走してしまうのも仕方がないだろう。
「これ見てみろよ」
「きゃあっ！」
レオンは彼女のスカートをまくると、その中の下着も一気に下ろした。
現れたのは一切毛の生えていない幼い割れ目だった。
縦に伸びる一本線を隠すものは無く、離れた場所にいる神父達にもその様子がよく見えた。
子供のようなプニプニした恥肉は、中からエッチな液体を溢れさせており、そのギャップが一層卑猥に見せていた。
レオンはそこに手を伸ばすと二本の指で閉じていた割れ目を左右に開いた。
「ニチャアっ」と糸を引いて暴かれたオマンコは中まで美しいピンク色をしており、グロさとは無縁の侵し難い聖域のようであった。
レオンは彼女の膝裏を持って抱え上げると、その聖域（オマンコ）を四大神の像に見せつけるような格好にする。

「ああぁ…神よ…申し訳ありません…」
「謝る事はないだろう。神だってきっとチンコをギンギンにさせて喜んでるさ」
「黙りなさい……貴方の事は、絶対に許しませんので…」
「くはは。脚を開いてオマンコを大公開しながら言う台詞としては傑作だな」
「……くっ…」
「さーて、神に今から失う処女膜は存分に見せつけたか？なら、そろそろお別れといこうか」
レオンはズボンの中から剛直を取り出すと、抱え上げている神聖呪歌の柔らかい恥裂に当てがった。
そして一気に突き刺す。
「〜〜〜〜!!!」
声にならない悲鳴を上げて、彼女は涙を流す。
その姿をニヤニヤと愉しみながらレオンは腰を振った。
パンパンと肌同士がぶつかり合う音が響く度に神聖呪歌の身体は跳ね、大きな胸は激しく揺れる。
「あっあっあっあっ…んんんんん!!!」
性器の結合部からは破瓜の血を流しながら、彼女は身体を震わせ何度も絶頂を迎え

る。

それでもピストンを止めることのないレオンは、イく度に一物を強く締め付ける彼女の膣内を存分に堪能した。

それはレオンが達し、彼女の中に精液を放出するまで続けられた。

その後、胸や口まで犯された彼女は、力尽きて意識を失い、目覚めた時には教会のベッドに横になっていた。

側にいたシスターから、レオンが気を失った自分を見世物にする様に教会の前で再度犯し、飽きたらその場に捨てて城に戻った事を聞いた彼女は、彼がいかに危険で抹殺しなければならない存在であるかを本国で語ったという。

数日後、漆黒聖典の隊長を連れて王国に戻ってきた神聖呪歌は、彼への意趣返しに成功する。

誤算があるとすれば、法国が彼の力を消すには惜しいと判断し、同盟を求めた事だろうか。

憎い男が自分達の隊長にビビる様子は胸がすく思いだったが、その男と定期的に顔を合わせる関係になった事に彼女は心底落ち込んだ。

ギルドでの屈辱

ラナー懐妊の情報は数日後には王都中に知れ渡った。
しかしその相手が実の兄であるレオン王子と言うことも公然の秘密として知られている為、国民達は祝って良いのか分からずなんとも気まずい空気に包まれていた。
大通りでは至る所で人々がその話をしている。
それを聞き顔を歪めるのはラナーの親友を自負しているラキュースである。
あの色欲王子の事は知っているつもりだったが、まさか妹に手を出すほどの下郎であるとは思わなかった。
彼女は冒険者ギルドに辿り着くと、半ば蒼の薔薇の特等席と化している壁際のテーブルに足を向けた。
途中、例の噂をしている冒険者達の話が耳に入ってくる。
「あのラナー王女を孕ませるとか夢だよなぁ」
「可愛い声で啼くんだろうよ」
「へへへ。あのお姫様が兄貴に犯されてたって想像するだけでヌケるぜ」
あの子の苦しみも知らないで、とその男達を睨んでしまう。

テーブルに座ってラキュースを待っていたイビルアイは、彼女のその様子を見て注意する。

「おいラキュース。気持ちは分かるがそんな顔をするんじゃない」

「イビルアイ…」

「兄妹で子を作る王族など私でさえ初めて聞いた。ああいう下世話な話はしばらく続くだろう」

２００年以上生きるイビルアイでさえ、例の王子は信じられない存在であった。

「しかし、あの男がここまで節操がなかったとはな」

以前、衆人環視の中、受けた辱めをイビルアイは思い出す。

あの日以来、蒼の薔薇に対して下卑た視線を向ける男が増えた。

最高位の冒険者が揃って男に下着を差し出し、内１人は抵抗も出来ずにイかされたのだ。

女が自分より上に立つ事に不満を持っていた者達や、強い女が屈服する姿に性的興奮を覚える輩にとっては、愉快極まりない出来事だったらしい。

あの場にいた冒険者達は今も面白おかしく蒼の薔薇が如何に無様を晒したかを語っている。

「ねぇイビルアイ。私、ラナーに会いに行こうと思うのだけど」

「やめておけ。あの男に会えばお前まであの王女と同じ運命を辿る事になるぞ」
「そ、それは…」
「正直、私は王都に留まる事自体危険だと思っているくらいだ」
それはイビルアイの本心だ。
レオンがその気になれば、自分達はなす術もなく以前の様な屈辱を受ける事になる。
前回は彼が「冒険者の下着を見る」という目的に固執していたお陰であの程度で済んだが、アレはかなり幸運な事だったと後から知った。
レオンに目を付けられて犯されなかった者など全体の1割にも満たないらしい。
しかし、それ以上に危機感を覚える理由が他にあった。
それは、イビルアイの顔を見られてしまった、という事である。
血の様に紅い瞳と白過ぎる肌は見る者が見れば一瞬で吸血鬼の特徴だと見抜ける事だろう。
もしそれが露見すれば蒼の薔薇は英雄から一転、人類の裏切り者へと成り下がってしまう。
「…そうね。王都を離れるかどうかはまた皆で話し合いましょう」
「了解した」
重要な事は全員で決める。

それが蒼薔薇の方針だと思い出し、確かに2人でする話ではなかった、とイビルアイはそれ以上は言わなかった。

「……それにしても2人共遅いわね」

「王女の状況を探りに行っているのだったか」

「ええ。やっぱり私が直接会いに行った方が良かったかしら」

「それは危険だと今言ったばかりだろう。アイツらなら問題なく情報を持ち帰るさ。もう少し待て」

「そうね。少し焦り過ぎてたかもしれないわ」

リーダー失格ね、とラキュースは苦笑いする。

いつも頼りにしているガガーランが、個別の依頼でしばらく王都を離れている中耳に入ってきた今回の情報である。

ラキュースは少しどころでは無く余裕がなかった。

それを年長者として見抜いていたイビルアイは、彼女の焦りを取り除こうと話題を変える。

しかし、いっこうに現れる様子のない仲間の双子に、ラキュースの表情は晴れる事はなかった。

☆

ギルドの入り口から新たな来訪者があったのは、ラキュース達が話し始めて３０分程した頃だった。
最初、特に気にする事なく会話を続けていた彼女達だったが、ざわつき始めた周囲の人間に釣られてそちらに目を向けた。
「なっ！」
「やあラキュース。それにイビルアイ」
「殿下…何故ここにっ！」
そこにいた男、レオンはニヤリと笑いながらラキュース達のテーブルに歩いてくる。
「お前達に用があってな。わざわざ足を運んでやったんだ感謝するが良い」
「……私達に何の用だ」
仮面の下で思い切り睨みつけながらイビルアイは訊ねる。
それにレオンは、彼女の仮面を指さして答えた。
「イビルアイ。お前のその仮面の下についてだ」
「！」
「俺個人としてはお前が何であろうと構わなかったんだ。だが、最近同盟を結んだ者達がお前の様な存在に敏感でな。俺の国でのさばらせていると知られるのは不味いんだ」
「同盟…？…それでお前は私をどうするつもりなんだ？」

咄嗟に反応出来る様に身構えながら、イビルアイは返答を待つ。
この王子が同盟相手に気を遣う事がそもそも違和感があるが、イビルアイの種族――
―吸血鬼に敏感な国と言われて思い浮かぶのはスレイン法国だ。
あの国は人間至上主義を掲げ、異種族であれば子供であろうと容赦なく殺す非道な集団だ。
もしレオンの同盟相手が彼の国ならば答えは一つだろう。
「特に恨みはないが殺すしかないだろうな」
軽い調子で述べられたその台詞に、ラキュースとイビルアイは揃って身体を固くする。
想像していた最悪の事態だった。
イビルアイはチラリとラキュースに目をやり、自分の取るべき選択を考える。
そして直ぐに結論を下すと、戦闘態勢を解き大きく息を吐いた。
「…わかった。私を好きにしろ」
「イビルアイ何を言っているの！」
「潔いじゃないか。こちらとしても楽で助かる」
「ただし条件がある」
「……言ってみるが良い」

面白そうに笑ったレオンは顎で続きを促す。
「仲間達は何の罪にも問わないで欲しい」
「イビルアイ…貴女…っ！」
「ラキュース分かってくれ」
こんな事になるなら顔を見られた時に直ぐにでも王都を離れていれば良かった。そうイビルアイは後悔する。
ここで下手に抵抗しても仲間に迷惑が掛かるだけだ。
大人しく降る事で、ラキュース達に被害が及ぶのは避けようと彼女は考えた。
しかし、次にレオンか発した言葉はそんな思惑を一切無視するものであった。
「化け物と知りながら、それを討伐するでもなく、兵士に伝えるでもなく、あろう事か仲間として行動を共にしていたんだ。罪に問わない訳がないだろ。蒼の薔薇は全員同罪だ」
「なっ！頼む！私は殺してくれても構わないんだ！」
「やめてイビルアイ！殿下もイビルアイが人類の脅威になる様な存在ではない事がわかっている筈です！」
それぞれ仲間の為にレオンに懇願する彼女達に、彼は「困った」という風に頭をかく。
「そう言われてもだな、同盟相手が納得しないんだからどうしようもないだろ？」

「そんな……」

俺は何とかしてやりたいんだがな、と意地悪そうな顔をするレオン。

しかし、ふと思いついた様に「あっ」と声をあげると2人に向かって笑いかけた。

「いいこと思いついたぞ。ラキュース。お前がイビルアイを殺せば、他の蒼の薔薇の罪は問われんだろ?」

「!!」

普段、色欲王子と呼ばれ、毎日の様に女性を犯している為忘れがちだが、レオンの趣味は「人の嫌がることをする」事だ。

本気で言った訳ではないが「仲間を殺せ」と言われて絶望した顔をするラキュースは、彼にはとても嗜虐心を唆られた。

「私が…イビルアイを…殺す、ですって?」

「ああ、そうだ」

「よくも…よくも言えたモノね!!」

瞬間、ラキュースは装備していた魔剣をレオンに向けて射出する。

仲間が殺されるのを許容出来るはずのない彼女には、最初からこうする他選択肢はなかった。

もしこれで他の仲間達も「王子を攻撃した一味」として追われる様な事があれば、皆

で帝国に逃げればいい。
　それに不満を持つ様な仲間ではないのは明らかだ。
　魔剣を喰らい、派手に吹き飛んだレオンを見てイビルアイは舌打ちする。
「ああ、もう！ラキュースお前はリーダー失格だ！このバカ娘！」
「ふんっ。仲間を見捨てる様なリーダーなんてごめんだわ」
「ちっ。こうなったら仕方ないな。呉々も殺すなよ」
「分かってるわ！ティナとティアが来るまで粘ったら一緒に逃げるわよ！」
　覚悟を決めたイビルアイも、発現させた水晶の槍をレオンに飛ばす。
　しかし、魔剣を受けても平気な様子で起き上がった彼は、飛んで来た水晶を右手で殴って砕いた。
　突然始まった《最高位冒険者》と《王国最強》の殺し合いを、その場にいた冒険者達は床に這いつくばって見守る事しか出来なかった。
「たくっ。冗談だったのにいきなり攻撃してくるんじゃねぇよ」
「言ってはいけない冗談もあるのよ」
「そうかよ。蒼の薔薇は皆そうだな」
「……どういう意味かしら？」
「これ、わかるか？」

レオンは懐から二本のクナイを取り出した。
「それっ…あの子達の…っ！」
「城に忍び込んでるのを見つけてな。お前に言ったのと同じ事を言ったら攻撃して来たぜ」
「……あの子達をどうしたのかしら」
ラキュースは殺気を放ちながらレオンに問いかける。
「殺してはいない。殴って犯してボロ雑巾みたいになってるけどな」
レオンがそう答えた瞬間、ラキュースは一気に斬りかかった。
それに合わせてイビルアイも魔法を発動させる。
「遅えよ」
しかし、目で追えないスピードで動いたレオンの蹴りによって、2人は瞬く間に床に沈められてしまった。
「ゲホッゲホッ…」
「グッ…私以上…だと…？…グハッ」
腹部を押さえて立てないでいるラキュースを放って、イビルアイに近付いたレオンは彼女の頭を踏みつけて床に叩きつけた。
「これが法国の秘宝か。凄まじい効果だ」

レオンは法国と同盟を結ぶにあたって、いくつかの秘宝を譲り受けていた。
今身に付けている指輪は、装備者のスピードを増幅させる効果があった。
彼は更に首輪型のアイテムを取り出すと、踏み付けていたイビルアイの首に装着した。
「…っ…何をした貴様…！」
「イビルアイ。立て」
「なっ……」
命令に従い勝手に立ち上がる身体に驚きの声を漏らすイビルアイ。
彼女の首に着けられたアイテムには《支配／ドミネート》の効果が込められていた。
アイテムの効果を確認したレオンは、床に伏しているラキュースにも同じ物を装着した。そしてイビルアイの隣に立つ様に命令する。
「良かったな首輪がちゃんと効いて。これで殺さなくても済む」
レオンの顔は最高のオモチャが手に入った事でとても愉しそうに歪んでいた。
☆
――――クチュ…クチュ…クチュクチュ…
冒険者ギルドの中には2つの水音が響いていた。
発生源にはテーブルの上に座り、自らの秘部に指を這わせる2人の女性がいた。

勿論ラキュースとイビルアイである。
下半身は既に裸にされており、M字に開かれた脚の奥にある濡れた恥裂が良く見えていた。
ギルドにいる冒険者達は野次を飛ばしながらその光景を眺めていた。
「ラキュースさーん！野郎に見られながらのオナニーは気持ちいいかい？」
「ケツの穴がヒクヒクしてるぜ！」
「イビルアイの嬢ちゃんパイパンだったのか。こりゃマジでガキか？」
「ガキでもあんだけ濡らしてりゃ俺の肉棒だって咥えられそうだぜ」
「くくく。それ、ギルドマスターに見せてアダマンタイトまで上り詰めたんじゃねえか？」
「違えねぇ！」
好き放題に言われ、悔しげに睨み付けるラキュースだが、その手の動きが止まることは無い。
何故なら《支配／ドミネート》によってオナニーを強制されているからだ。
女だけのチームにも関わらず、自分達より高いランクにある蒼の薔薇を快く思っていなかった男達はここぞとばかりに2人の痴態を笑い、蔑める。
しばらくして2人仲良く絶頂を迎えた彼女達に、冒険者達は今日一番の盛り上がりを

見せた。
「はぁ…はぁ…くっ、下衆共が……」
「はっはっは！イビルアイちゃん！ビクンビクンとオマンコ震えさせながら言っても無様なだけだぜ！」
「んっ……貴方達…恥を知りなさいっ！」
「クリトリス勃たせてる女の言う台詞じゃあねぇなラキュースさんよ！」
レオンは笑い者にされて頬を染めるラキュースに近付いた。
そして美しく茂る陰毛を撫でると、その下にある陰核へと指を伸ばした。
「あうっっ!!」
膨らんで充血したソレを触られ、ビクッと身体を震わしたラキュースは、無防備に晒した一番弱い部分をレオンに摘まれてしまった。
続いてイビルアイのクリトリスも剥き出しにして摘んだレオンは、指で擦る様に刺激を与え始めた。
「あっ、あっ、あっダメっ…で、でんかっ…んんっ」
「やっ…やめ、ろっ…んああっ、あああっっ、…！」
我慢出来ずに甘い声を出す2人は、無力な少女そのものであり、とても英雄と呼ばれる程の強者には見えなかった。

しばらくの間、可愛らしい喘ぎ声で冒険者達を愉しませた2人は、その後レオンにクリトリスを思い切り引っ張られ、無様に失禁を披露する事になった。

☆

ラキュースは自分の性器にキスをする、レオンの剛直をただ見つめることしか出来なかった。

膣内から溢れた愛液は、接触部を伝って彼の硬いソレをコーティングしていく。

周りでは自分に告白してきた少年や、尊敬の眼差しを向けてくれていた少女、数日前に言い争った男など多くの冒険者達が此方を見ていた。

アダマンタイト級に昇格してから数年。

少しずつ築き上げてきた信頼やプライドが崩れていく様な感覚を覚える。

男に抵抗も出来ずに犯される女が、今後どんな顔をして最高位の冒険者を名乗ると言うのか。

そんなのは周りが認めないだろうし、何より自分自身が耐えられないだろう。

「ズニュゥゥっ」と膣壁を掻き分けて侵入してきた肉棒に散らされるのは、自分の純潔だけでなく築いて来た全てであろう、とラキュースは思った。

根元まで飲み込まれた一物をレオンが抜き出すと、破瓜の血で赤く濡れた亀頭部分が皆の目に触れる。
それを見て口笛を吹き、歓声をあげる男達の声を聞き、自分が乙女ではなくなった事をラキュースは理解した。
「あ……あぅ…ぁ……っ…うぅぅぅ…っ」
レオンが再び肉棒を挿入し、腰を振る度に何かが磨り減って行くのを感じる。
頬には涙が伝い、口からは嘆きの声が漏れ出してしまう。
「ラキュース脚を開け！」
「あぅ……はい…っ」
「それと、もっと気持ち良さそうな声を出せないのか？」
「あぁぁ…あんっ♡はぁあああっ、やぁぁ…、んああっ♡」
「よーし。それで腰振ってくれれば文句は無い」
「はいいいいいいっっ♡あんっ、あっ、あああっ、あああああっ♡」
首輪の効果で望まぬ喘ぎ声をあげさせられる。
レオンの腰に抱きつく様に脚を回し、腰を振る自分は娼婦より卑しく見える事だろう。
それを理解しながらも動きを止めることの出来ないと言う苦痛に、ラキュースは耐え

続けた。

そしてレオンの熱いモノを膣内に注がれるとその場に放られた。

レオンが命令を解除しない所為で、床に転がりながらも脚を開き、腰を振るという痴態を晒すラキュースにギルドは笑いに包まれる。

その後、イビルアイは泣いて許しを乞うまで身体中の穴という穴を犯され、ラキュース同様床に転がされる事になった。

無様な踊りを揃って晒す2人は何度もレオンの肉棒で貫かれ、徹底的にプライドを折られるのであった。

シャルティア

その日、レオンはある部隊と行動を共にしていた。

《漆黒聖典》

１２人の隊員全員が英雄級以上の実力者で構成された、人類最強の精鋭部隊である。

彼らの所属するスレイン法国からの要請により、レオンは今回彼らの任務に付いてきていた。

内容は『世界を滅ぼしかねない竜王の調査』である。

戦力はいくらあっても足りないということか。

人類最高峰の実力を持つ隊員達も、ピリピリとした空気を纏っていた。

「神聖呪歌だっけ?･そんなに緊張せず行こうぜ」

「なっ……やめて下さい」

レオンはそんな空気を無視して、１人の隊員に声を掛ける。

美しい容姿の彼女は、突然側に現れ、自身の肩に手を置くレオンに身体を硬くする。

彼はその手をゆっくりと下げていき、神聖呪歌と呼ばれた女性の胸を掴んだ。

臨時のメンバーの目に余る行動に、他の面々は顔を顰める。

しかし、彼らは一言も発する事なく、自分達の隊長へと視線を向けた。
《同盟関係にある他国の王子》程度に躊躇する漆黒聖典ではない。
彼らがレオンに強く出られないのは、その強さの所為であった。
人格破綻者も所属する漆黒聖典だ。
隊員達はその実力のみでその地位に就いている。
故にこの場に置いて強さは発言力と比例し、レオンを止められるのは隊長ただ1人だけであった。
「はぁ……。レオンさん。そういった行為は控えて下さい」
溜息を吐きながら、丁寧な口調でレオンを制止する隊長だが、その目には「従え」という強い意志が込められていた。
彼我の実力差をはっきりと感じ取ったレオンは、冷や汗を流しながら神聖呪歌の下半身に伸びていた手を引っ込める。
「あークソ。ちょっとしたスキンシップじゃねぇか。別にまた犯そうってんじゃねぇし大目に見て欲しいな」
「仲間に対する無礼を見逃す訳がないでしょう。それに我々は今人類の存亡に関わる重要な任務の最中ですよ?」
「同盟を結んだ時にある程度の指示に従う事には了承したが、そんな大層な任務が『ある

程度』か？」
　不満を零しつつ、これ以上は隊長の怒りに触れると判断しそれ以上は口を噤む。
　その後、彼らは会話もなく進行を続けた。
　☆
　エ・ランテル近郊に辿り着いた時、彼らは低級のアンデッドの襲撃を受けた。
　それを難なく屠ると、更に接近してくる強大な気配に備える。
「そんな……た、対象…推定難度２５０以上…！」
「なっ!?」
「総員戦闘態勢を取れ!!」
『了解』
「破滅の竜王、なのか？」
「分からないが我々の手に負えない可能性がある。カイレ様。神器を使用する用意を」
　素早く指示を出した隊長は、直後、殴り掛かってきた襲撃者の一撃を槍で受ける。
　その一回のやり取りで襲撃者の危険度を理解した彼は、迷わず後方の老婆に指示を出す。
「使え！」
　カイレと呼ばれた老婆は、神器から龍の様な雷を発生させて襲撃者に放った。

襲撃者は避けることも出来ずにそれを喰らう。
しかし最後の抵抗にと、ソレは雷に包まれながら反撃を行った。
凄まじいスピードで投擲された槍はカイレに向かって一直線に飛んで行く。
「うおっ」
偶然カイレの側にいたレオンは、飛んできた槍から咄嗟に彼女を守り、槍を後方へと受け流した。
それを最後に辺りに静寂が訪れる。
一瞬の間に行われた攻防は、漆黒聖典の勝利で終わった。
神器の一撃を受けた襲撃者は、直立し一切動くことはない。
面々は恐る恐る襲撃者に近付いた。
ソレは美しい少女の姿をしていた。
真紅の瞳に絹の様な滑らかな銀髪。
可愛さと美しさが完全に調和した顔。
レオンが知る最高の美少女ラナーをも上回る程の圧倒的な美がそこにあった。
「吸血鬼、か。神器による支配はなんとか成功したようですね」
「これほどの敵を相手に負傷者もゼロか。上出来だな」
「レオンさんもカイレ様を守って頂きありがとうございます」

「ふん」
　隊長からのお礼の言葉を鼻を鳴らして返すレオン。
　彼の目は吸血鬼に釘付けになっていた。
「なあ、こいつどうするんだ？」
　興味本位で訊ねる。
「連れて帰りますよ。彼女が破滅の竜王なら良し。違うならそれに対する大きな戦力になりますからね」
「なるほどな」
「どうかしましたか？」
　隊長は、先程から吸血鬼の少女に向けられている邪な視線から、レオンの考えている事に予想が付いていたが、念の為に訊ねる。
　案の定、レオンが口にしたのは欲望に染まりきった内容だった。
「こいつ抱かせてもらえないか？」
「……何を言っているのですか貴方は」
「今こいつはあの婆さんの支配下なんだろ？なら抵抗せずに俺に抱かれる様に命令して貰えれば危険はない筈だ。さっき婆さんの命を救ったのが誰だか忘れたわけではないだろう。褒美だと思って頼めないか？」

自分達を攻撃してきた異形の化け物を平気で抱くと曰うレオンに隊員達は呆れた様な顔をした。

この男はヤル事しか頭にないのか、と。

隊長は性欲に忠実過ぎるこの協力者を扱いかねていた。

先程のカイレを助けた動きは見事なものであった。

彼の働きがなければ彼女は間違いなく死んでいたし、支配に失敗した吸血鬼の攻撃で他にも死者を出していた可能性も高い。

ただ見ている事しか出来なかった他の隊員達と比べて、どちらが戦力になるかは考えるまでもない。

しかし同時に協力者でしかないレオンは、法国への忠誠心や人類を救うと言う誇りだけでは動いてはくれない。

秘宝の贈与や法国による庇護を約束しているとは言え、それも戦力差を背景にして半ば無理矢理納得させたモノだ。

働きに見合った報酬を与えなければその内不満を爆発させかねない。

そこまで考えて隊長は直立する吸血鬼に視線をやる。

神器の支配下に置いた以上、たとえ神であっても抗う事は不可能だ。

レオンの言う通り危険はない。

彼女をレオンが抱く事によって法国が受ける被害はほぼ無いだろう。
少なくとも神聖呪歌をはじめとする女性隊員へのセクハラよりは許容可能だ。
「……分かりました。今回に限り許可します」
「なんだ話が分かるじゃないか」
「ですが。あまり我々を舐めた様な発言は今後は控えて貰います。こう言ってはアレですがこれ程の戦力が手に入りましたので、貴方の価値は低くなりました」
「……ふん。了解した」
レオンに釘を刺した隊長は、自身のハッタリが成功した事に内心安堵する。
傾城傾国。
神の残したその神器は誰もが無限に使える様な扱いやすい代物ではない。
現在法国にカイレ以上に扱える者はいないし、使用する毎に精神力が大きく削られる。
今回捕らえた吸血鬼も有事の際の切り札という扱いに収まるだろう。
レオン本人には価値が低くなったと言ったが、実際は少なくとも出撃前よりは価値が上がっていた。
それを一切悟らせない様にしつつ、隊長は皆に指示を出す。
「任務は完了だ。これより本国へ帰還する。レオンさんもするのはエ・ランテルの拠点

に戻ってからにして下さい」
『了解』
「ああ」
一同は吸血鬼を連れて帰路に着いた。
☆
エ・ランテルにあるスレイン法国の拠点の一室にてレオンは吸血鬼と向かい合っていた。
少し前までカイレもこの場にいたが、吸血鬼にレオンの言葉に従う様に命令すると退室していった。
「お前名前は？」
「シャルティア・ブラッドフォールンでありんす」
「シャルティアか。確認するが、今お前は俺の命令に絶対服従って事で良いか？」
「そうでありんす。カイレ様より貴方様の命令に従う様に言われておりますので」
「ならば良い」
レオンは早速とばかりに彼女――シャルティアのたわわに実った果実に手を伸ばした。
「ん？」

フニフニと形を変える胸は見た目だけなら最高に魅力的な物であった。
しかしその感触にレオンは違和感を抱く。
彼はドレスの胸元を掴むと思い切り左右に引き裂いた。

――ポトポトッ

床に落ちる無数のパット。

「……」
「……」

嫌な沈黙が部屋の中に訪れる。
レオンは恐る恐る床に向けていた視線を、彼女の胸へと戻した。
そこにあったのは気持ちばかりの小さな膨らみと、その頂きにポツンと鎮座した乳首だけだった。
レオンは別に巨乳好きと言う訳ではない。
むしろ胸よりはパンツを見る方が好きだし、もっと言えばその時の照れた顔こそ至高だと思っている。
だが、完璧に整った容姿にどこか女王様然としたシャルティアの無乳は、とても虚し

く映ってしまった。
レオンはシャルティアの小さな乳首を両手で摘み、こねくり回す。
クリクリと指の中で転がる美しい突起は、しばらくすると膨らんでいき、ツンと上を向いて勃起してしまった。
無表情に見えるシャルティアの頬は心なしか赤く色付いている様に見え、レオンは「これはこれでいいな」と感想を抱く。
「気持ちいいのか？」
「はい」
「……ピンピンに勃っているな」
「そうでありんすね」
「……」
シャルティアの反応を楽しもうと思ったレオンだったが、最低限の受け答えしかしない彼女に眉をひそめる。
「つまらんな。――おいシャルティア。思っている事を自由に言え。俺を楽しませろ」
「わかりました」
命令を上書きしたレオンにシャルティアは頷き、一度瞳を閉じた。

そして次に目を開いた時、彼女の顔にはこれでもかと怒りの感情が込められていた。
「おんし……妾にこの様な事をしてタダで済むと思わない事でありんす」
「ほう。先程までの無表情に比べればずっと苛め甲斐がありそうだ」
レオンは面白そうに笑うと、彼女の乳首を思い切り捻った。
「ぅっ…」
「さて、それじゃもう一度聞こうか。乳首を弄られて気持ち良かったか?」
「くっ……き、気持ち良かった…でありんす…!」
「聞こえんな。大きな声で言え」
「き、気持ち良かった!と言ったでありんす!……ぐっ…口が勝手に…」
尚も乳首を弄り続けるレオンをシャルティアは殺意を込めて睨んだ。
「殺す」
「くくっ。わかっているじゃないか。そうやって強気な態度を取ってくれると此方としても興奮するんだ」
「人間如きが調子に乗るなっ!」
レオンを殺すべく全力で身体を動かそうとしたシャルティアだが、身体は一ミリも動く事はなかった。
「立場は分かったか?なら次の命令をするぞ。――跪いて俺の肉棒を舐めるが良い」

「なっ…くっ、クソ！殺す！殺してやるでありんす！」

「フハハ。命令は絶対だ」

自分の意思に反して膝を着き、レオンのズボンを脱がそうとする身体にシャルティアは苛立ちを見せる。

しかし、せめてモノ抵抗として思い切り悪態を吐く事くらいしか出来なかった。

☆

シャルティアはズボンから飛び出たレオンの一物に「ひっ」と小さく悲鳴をあげる。

それは普段彼女が使う張り型に比べ遥かに巨大だったからだ。

更に言えば異性経験のない彼女は実物のソレを見たことがなかった事も原因だろう。

血管の浮き出た黒い肉棒を舐める事に、彼女は躊躇する。

しかし、命令を受けた身体はそうではなかった様で、両手でソレを掴むとゆっくりと口を近付けていった。

小さな口でチロチロと先端を舐めるシャルティアを見下ろし、レオンの剛直は大きさを増す。

幼いながらも女王の如き佇まいの少女――しかも自分より遥かに強い――が自分の一物を舐めているのだ。

それは、最近まで自分より強い人間に会ったことのなかった彼にとって初めて経験で

あった。
　弱者を屈服させるのも確かに面白かった。しかし、強者を屈服させる事はこれほど満たされるモノなのか。
　レオンは知らず知らず満面の笑みを浮かべ、自身のチンコに必死に舌を這わすシャルティアの頭を上下関係を教える様に撫でてやった。
　悔しげにレオンを見上げる彼女は、それでも舌の動きを止める事はない。
「下手くそだなシャルティア。そんなんじゃ一生かかっても達しないぞ」
「ちゅっ……うるさいでありんす……んっ」
「はぁ…もう良い。とっとと咥えろ」
　レオンの命令に従い、大き過ぎる肉棒を口に含むシャルティア。
　それを見届けたレオンは、彼女の後頭部を掴み、一切の遠慮なく腰を振り始めた。
「んんんっ～～～!!!」
　レオンの肉棒は何度も出入りを繰り返し、彼女の喉の奥まで犯していった。
　余りの苦しみにシャルティアの目からは涙が溢れ、声にならない悲鳴をあげる。
　レオンはその様子を見て更にピストンを早めた。
　その後、数分に渡って口内を犯されたシャルティアは、喉の奥に精液を吐き出されてしまった。

「ゴホッ、グゥ…うぅ…はぁ…はぁ…」
「ああ、吐き出すなよ。全部飲み込め」
「う、ぅ、うっ…ごくっ…の、飲んだでありんす…」
「見せてみろ」
「ん…」
涙を流しながら舌を出して口内を晒すシャルティアの姿はとても嗜虐心をそそられた。

☆

ブレイン・アングラウスはエ・ランテルの路地裏にて震える自らの身体を抱いていた。
そこに、遠くから近付いてくる足音が聞こえて来た。
今の情け無い姿を人に見られたくなかった彼は、物陰に隠れてやり過ごす事にする。
そうして見えてきた来訪者に、彼は心臓が止まる程驚かされた。
「おい雌豚。その貧相なケツをもっと卑猥に振ってみろ」
「こ、こうでありんすか…？」
「ぷはははは！最高に無様だぞ！」
「よ、喜んで貰えて良かったでありんす…」

現れたのは2人の男女だった。
女の方は地面に四つん這いになり、フリフリとお尻を振りながら歩いている。しかも衣服は一切身に付けておらず、小さな胸が丸見えになっていた。
男の方はそんな彼女を見下ろして笑い、時々その臀部をパチンと叩いて悲鳴を上げさせている。
タダでさえ衝撃的な光景だが、何より信じられないのがその女の正体が、ブレインを圧倒した吸血鬼――シャルティア・ブラッドフォールンであった事だ。
男に怯えた様に表情を歪める彼女を見るに、この状況は本意ではないのだろう。
どちらかと言えば男の方の立ち位置が似合う彼女は、逆らうことも出来ずに雌豚呼ばわりを受け入れていた。
「ん？おい雌豚！テメェの汚ねえマンコ汁が俺の靴にかかったぞ！」
「も、申し訳ありんせん」
「舐めて綺麗にしろ」
「は、はいぃ…」
シャルティアは言われるままに男の足元に顔を近づけ、自分の愛液を舐めとり始めた。
ブレインのいる方に、高く突き出した尻を向ける形になり、彼の目にタラタラと卑猥

な汁を垂れ流すオマンコが見える。
　男の靴を舐める動きに合わせて上下に揺れる小振りなお尻は、ブレインを誘っているかの様だった。
　その姿に、彼女の化け物の様な素顔を見ている彼でさえ股間を膨らませてしまう。
「綺麗になりんした…」
「ん、そうか。ならその体勢のままケツをこちらに向けろ」
「…はいでありんす」
　再び見えたシャルティアの顔は屈辱の所為で紅くなっていた。
　男はそんな彼女の肉壺に指を入れると「クチュクチュ」と掻き回し始める。
「んっ……あっ、あっ♡…んんっ」
「なあシャルティアよ」
「ああっ♡…んっ、な、なんでありんしょう…？」
「従順に雌豚になりきったらレイプは勘弁してやると言ったな」
「あああんっ♡は、はいぃ！約束したっ、でありんすぅ♡」
　男が指を抜き差しすると、シャルティアは次第に大きな声を出して喘ぎ始める。
　しかしその目には不服従の意思がこもっており、今の会話を聞いたブレインにも彼女の喘ぎ声が演技の物であると分かった。

「そうだな。約束した。確かにしたな」
「はいっ♡…わ、わたしの雌豚ぶりはっ、んっ♡どうでありんしたぁっ？」
「大した演技だったぞ。だが、残念なお知らせがある」
「？」
嫌な予感をしつつ言葉の続きを待つシャルティア。
男はそこで一呼吸置き、何故か誇らしそうに言い放った、

「俺は、約束を守った事がない」

「へ？それはどうい―きゃあああぁぁぁぁっ!!!!」
いきなり挿入された肉棒に、シャルティアは悲鳴をあげた。
男はそれを無視して何度も腰を叩きつける。
「き、貴様ぁぁあ!!!よくも！よくもぉおおおお!!!!」
「おお！処女ではないと言っていたが、中々締まりの良いマンコではないか！」
「うづうっっ！ごろすっ！殺してやるづぅウ!!!」
「何だ泣いているのか？見た目に似合わず純情な奴だな」
「ひぐっ、あぁぁぁぁぁ、ぺろろんちーのさまぁ…ごめっ、ごめんなさいぃぃぃ!!!」

聞いているブレインの胸を締め付ける程の悲しみの声を出すシャルティア。
美しかった顔はクシャクシャに歪み、頬を大粒の涙が流れて行く。
それはどこからどう見ても無理矢理犯される無力な少女にしか見えなかった。
見ていられなくなったブレインは、静かにその場を去った為、その後の光景を見ずに済んだ。
もし最後まで残っていれば、1人の少女が徹底的に壊される様を目撃する事になっていただろう。

少女達の絡み

翌朝、拠点に戻ってきたレオン達は、暗い顔をした隊長から衝撃的な話を聞かされた。

――カイレの死亡。

昨日の夜、拠点に現れた法国の裏切り者（クレマンティーヌ）と運悪く遭遇して襲われたらしい。

側にいた隊員が撃退した時には既に生き絶えていたとか。

法国に戻れば蘇生魔法で蘇らせる事は出来る。

しかし、問題はシャルティアの処遇だ。

カイレがいない間、シャルティアをコントロール出来る人間が漆黒聖典側にいないのだ。

そこで、まだシャルティアに対するレオンの命令権が有効であるとの確認がされると、彼女はレオンが王国に連れて帰る事になった。

レオンごと法国に招く案も出たが、彼の信用はそれ程高くなくシャルティアという戦力を自由に出来る状況で本国に入れるのは危険と判断された。

「そう言う訳ですので、カイレ様を蘇生する間、その吸血鬼は王国で預かっていて下さい」

「うむ。構わないぞ」
「……言っておきますが法国には彼女より強い方もいますので、変なことは考えないで下さい」
「信用がないな。こんな化け物が世界にいると知ったんだ。それに対抗出来るスレイン法国をどうこうしようなど考えない」
「……いいでしょう。その言葉を信じます」
隊長はレオンに釘を刺すと本国へ向けて出発した。
残されたレオンとシャルティアはその姿が見えなくなるまで見送り、自分達も王都へ戻る事にする。

道中、何気なく訊ねたシャルティアの身の上話を聞いたレオンは、頭を抱えて絶望する事になる。
彼は王都に着くと直ぐに探知魔法対策の指輪を用意し、シャルティアにはめさせた。
彼女が至高と形容する主人が現れない事を願いながら。

☆

あれから半月。

レオンの元にはシャルティアの所属していた組織どころか、法国からの接触もなく、彼は平和に過ごしていた。

最初、彼らしくなくビクビクと怯えていた為、メイド達を大いに心配にさせたが、数日もするといつも通り彼女達に悪戯をして遊び始めた。

ローブで顔を隠したシャルティアもそれに加わり、その熟練のテクニックでメイド達に、レオンが聞いたことも無いほどの悦びの声を上げさせていた。

何処からともなく美女を連れて来て側におく事は過去にも何度も行なっていた為、シャルティアについて深く追求する者は居なかった。

どこかの貴族や商人の娘を攫ってきたのだろうと皆勝手に納得していたからだ。

現在、レオンは自室にてシャルティアに肉棒を咥えさせていた。

女性相手なら娼婦顔負けのテクニックで手玉に取る彼女だが、男相手は経験がないらしく、途端に生娘の様に初々しくなる。

今もレオンの太い物を咥えた顔は、全くいやらしさを感じさせず、寧ろ滑稽なくらいなのだが、それが逆に魅力的だとレオンは思っていた。

側で見ているメイド達も普段は女王様の様に自分達を弄ぶシャルティアの、その拙い姿にグッと来るものを感じている。

命令でレオンを至高の存在と思うようにシャルティアに言っている為、彼女は目を潤

ませて奉仕していた。
頭を撫でてやると嬉しそうに頬を緩ませ、口の動きを早くする。
少しして限界を迎えたレオンは、彼女の顔に精液をぶっかけた。
「嗚呼…レオン様ぁこんなにいっぱいかけて頂いて嬉しいでありんす」
「そうか。よし、次はお前を気持ち良くしてやろう」
「ほ、本当ですか！是非お願いしんす！」

期待する様に見上げて来るシャルティアに、レオンは「床に寝て脚を開け」と命令する。
それに躊躇する事なく従うと、彼女は自分の膝裏を持ち、脚を大きく開いた。
衣類を既に脱がされていた身体は惜しげも無くレオンの目に晒され、一番大切な部分も無防備に剥き出しの状態になった。
口淫の間にすっかり濡らしていた秘裂は、レオンの視線に触れて嬉しそうにピクピクと動いている。
レオンはそれを愉快そうに眺めると、靴を脱ぎ、脚で踏もうとした。
大切な場所を踏まれるという、わかりやすく上下関係を示す行為に、シャルティアは屈辱や喜びがごちゃ混ぜになった気持ちを抱いた。

しかし、あと数センチと言うところで、コンコンとドアをノックする音が響く。
レオンは「入るが良い」と入室を許可した。
入って来たのはラナーであった。
彼女は無様な姿を晒しているシャルティアを視界に収めると「まあ」とワザとらしく驚いた様な声を出した。
「こんにちはシャルティアさん。はしたない格好をされていますね」
「ら、ラナー…見世物ではないでありんすよ…」
「いえいえ。謙遜する事はありませんよ。とっても綺麗ですから見せびらかしたくなるのも分かります」
「グッ……これはレオン様が…」
「あら？お兄様の所為にするのですか？」
「くっ……腹黒が」
「ふふっ」
２人はレオンを無視して睨み合う。
彼は、シャルティアを踏みかけていた脚を除けると椅子に腰掛け、その様子をニヤニヤと眺め始めた。
彼女達の仲が悪いのには勿論理由がある。

それはシャルティアとラナーが初めて会った日の事だ。
レオンから基本的に自由を認められていたシャルティアは、女官から女騎士に至るまで城内の女を襲いまくっていた。
その被害にラナーもあってしまったのである。
廊下でシャルティアに遭遇した彼女は、お付きの少年騎士が見守る中ドレスを脱がされ、無理やり犯された。
女性器同士を擦り付け合うという未知の愛撫の餌食になった彼女は、クライムの目を気にする余裕もなく何度もイかされ、失禁する姿を晒すという辱めを受けたのだ。
レオン相手ならまだ納得出来たが、彼の奴隷の様な女に受けた屈辱にラナーは不快感を抑え切れなかった。
何より同性に抱かれてはしたなく粗相をした事実と、それを見てクライムが一物を大きくさせていた事が許せない。
あの時の彼は間違いなくラナーとシャルティアの2人の絡みに見惚れていたのだ。
他の女の裸が、愛する彼を興奮させる要因になったのである。
それからラナーはシャルティアへの仕返しを始めた。
本当は殺すつもりだったが、それはレオンが許さなかった為、徹底的にそのプライドを折りに行った。

レオンから一時的にシャルティアの命令権を得て、自分の脚を舐めさせたり、お尻の穴に白旗を刺した状態で廊下に放置したりである。
そんな事を続けた結果、今のような関係になってしまったのである。

ラナーは秘部を晒すシャルティアが命令によって動けないのだと即座に悟ると、ニコっと心からの笑みを浮かべた。
「シャルティアさん、お兄様の代わりに私がソコを踏んであげましょうか?」
「は、はあ!?おんしには用はないでありんす!とっとと失せなんし!」
「えー遠慮しなくても良いですのに。お兄様、如何ですか?」
レオンが面白がって認める事を確信しながらラナーは確認する。
案の定、彼は「好きにして良いぞ」と許可を出した。
「レ、レオン様!　私を気持ち良くしてくれるって、さっき…っ!」
「俺がとは言っていないぞ。見ていてやるからラナーに気持ち良くしてもらえ」
「そんなぁ……」
「ふふっ。それでは始めますね」
ラナーは靴を脱いで裸足になると、シャルティアの陰部を踏みつけた。

ザラザラとした感触と、ヌメッとした湿り気を足の裏に感じる。
脚を小さく動かすと陰毛と愛液が音を発し始めた。
――ジャリッ……ジャリ…
――チャッ……ピチャッ…
静かな室内に響く卑猥な音に、シャルティアの顔は真っ赤に染まる。
それは羞恥心は勿論、屈辱の所為でもあった。
その証拠に彼女の目はラナーを射殺しそうな勢いで睨んでいる。
しかし、それでも命令に逆らう事は出来ずに、身動きせず秘部を差し出す様な格好を維持していた。
「なんだかネチャネチャしていて気持ち悪いですね」
「んっ…ならばとっととレオン様と代わるでありんす！」
「お兄様にこんな不快な事させられませんわ。さあ、次はどうすればいいのですか？」
「死ね！女狐が――――フンッ。大体忘れたでありんすか？その気持ち悪い場所でオマンコを擦られて、あんあんイキまくった挙句、おしっこを漏らした事を」
「あ、すみません。脚が滑ります。えいっ」
「んあっっ……こ、この小娘が……ぶっ殺す!!!」
２人のやり取りをレオンは大笑いしながら見守った。

そして数分後、シャルティアがラナーの足で絶頂させられるのを見届けると、立ち上がってラナーの肩を叩いた。
「なかなか面白い見世物だったぞ、ラナー」
「ふふっ。ありがとうございますお兄様」
「うむ。では今度は攻守を交代してみようか」
「へ？」
『寝転がってシャルティアと同じ体勢になれ』
「なっ…お、お兄様…やめてっ…」
嵌めていた首輪が反応し、ラナーは意思に反してレオンの命令通りに動いてしまった。
脚を広げた所為でドレスが盛大に捲れ上がり、黒い下着が丸見えになる。
そこに、命令を解除されて自由の身になったシャルティアが立ち上がり、ニヤニヤと嗤いながらその姿を見下ろした。
「おんやぁ…？　随分と素敵な格好をしていんすねぇ？ラナー」
「……ありがとうございます」
「もしかして私の真似でありんすか？　それにしては余計な物が多い様だけど。ふふっ。私が手伝ってあげる」

現在のレオンのお気に入りがシャルティアである為、自分が辱めを受ける可能性は低いと見越していたラナーだったが、男のエロに対する考えはまだまだ理解出来ていないとしか言いようがなかった。

ドSの王女様が、苛めていた女から立場を逆転されてやり返される展開なんて男の大好物である。

パパッとドレスを脱がされ、最後に残った下着も膝まで下されたラナーは、先程までのシャルティアと同じ格好になった。

笑顔を貼り付けて感情を見せない様にしているラナーだったが、その頬は僅かに紅くなっている。

「あらぁ？　オマンコがびしょ濡れでありんすねぇ。私の裸体を見て興奮していたのかしら？」

「……そうですね。とてもエッチでしたから」

「フッ。そうやって笑顔で肯定して、羞恥心を隠しているつもり？　感情を完全にコントロール出来る御方や、表情の全く変わらないメイド達を見続けてきた私には貴女の拙い演技なんて意味ないでありんす」

そう言ってシャルティアは、長い舌を伸ばしてラナーの身体を舐め始めた。

胸の先端を舌先で転がして、あっという間に硬く起立させる。

それにヨダレを塗りたくってやると、とても卑猥な姿になった。
シャルティアはその2つの蕾を指で摘むと、擦って刺激し始めた。
舌は尚も淫らに身体を這わせて行き、ラナーの顔まで到達した。
頬、耳、鼻と次々と舐めて行き、最後に唇へと近付ける。
そして啄ばむ様にチュッとキスをすると、ラナーの口から「あっ」と甘い声が漏れた。
「んん♪美味しい。すっかり発情してるでありんすね。唇が物欲しそうに開いていんす」
「なっ…」
無意識だった様で、慌てて口を閉じるラナー。
シャルティアはそこにもう一度顔を近付け、数秒の短いキスをする。
糸を引いて離れるシャルティアの唇をボーッと見つめるラナー。
それを彼女はクスクスと笑う。
「お願いしてみなさい。そしたらまたキスしてあげるわ」
シャルティアのその誘惑に、ぽわっとした頭でラナーは考えると直ぐに屈する事にした。
「…キスしてください」
「そんなに気持ち良かったでありんすか?私のキスは」

「…はい、とても」
「くふふっ。なら仕方ないでありんす」
２人の唇が重ねられる。
積極的に舌を絡めるシャルティアに、ラナーも拙いながらも応えていく。
チュッチュッ…と卑猥な音を立てる彼女達の姿に、レオンの股間も硬くなってくる。
それでも麗しい少女達の絡み合いを邪魔しようとはせず、近くにいたメイド達に奉仕させ始めた。
「んあっっ♡」
シャルティアの指が下半身に伸ばされると、ラナーは大きな嬌声を発し、身体を跳ねさせた。
「おやおや。股の間が洪水になっていんす。指もベトベトで気持ち悪い」
「……すみません」
先程の自分と同じ台詞を返されて内心苛立ちを抱くラナー。
今の愛撫で軽くイった彼女は少し冷静さを取り戻していた。
このままでは初めて会った時の二の舞になる。
しかし、両手は開いた自分の脚を固定しており、自由に動かせなかった。
「小ちゃなお豆、見つけたでたりんす」

ラナーの陰部に標的を移したシャルティアは、彼女の恥芽を剥き出しにし、ペロペロと舐め始めた。
数秒もしない内に性感を高められ、あっという間に絶頂を迎える。
ビクビクと震えるラナーは、目を潤ませながらシャルティアを見つめた。
「シャルティアさん…先程はすみませんでした…」
「んん？何のことでありんす？」
「貴女の濡れたアソコを「気持ち悪い」と言ったことです」
「ああ、あれね。ふーん謝るの」
「はい。今はもう気持ち悪いとは思いません」
「へぇ…」
シャルティアはラナーが本心から言っていない事には気付いた。
自分の機嫌を取ろうとでもしているのだろうと。
しかし、面白い事を思い付き、その謝罪を受け入れる事にした。
「ラナー。許してあげる。だから――私のオマンコを舐めるでありんす」
形だけの謝罪でやり過ごそうとした罰である。
シャルティアはラナーの顔に自分の秘部を近付けた。
そして自分もラナーの秘部に顔を近付け、シックスナインの体勢にする。

「さあ、舐め合いんしょう」
ラナーの割れ目に舌を這わせるシャルティア。
膣や尿道まで舐め回し、溢れる愛液を味わっていく。
それによって与えられる快感に耐えながら、ラナーは目の前に晒されたシャルティアの恥部へとゆっくりと舌を伸ばした。

……チュッ…

「へ?…んあっ、や、やめっ…あああああああっ!!」
一瞬の出来事だった。
ラナーの舌の動きはあっという間にシャルティアを絶頂させた。
彼女は逃れる事も出来ずに刺激を与えられ続け、痙攣を繰り返す。
その隙にラナーはレオンに声を掛けた。
「お兄様。これではフェアではありませんわ。私への命令を解いて下さい」
予想外の展開に目を白黒させていたレオンだったが、妹の言葉を受けて「ラナー自由にして良い」と命令を上書きする。
その方が面白くなると判断した為に。

両手両足の自由を取り戻したラナーは、尚も絶頂の余韻に震えるシャルティアの下から抜け出すと、彼女の上に座り指で愛撫を始めた。
「あっ、あっ、うあっ、イ、イクぅっ!!!」
2度目の絶頂を迎え、失禁しながら倒れ込むシャルティア。
ラナーはそこに追撃し、3度4度と絶頂させていく。
そして数分後にはシャルティアは意識を失い、ラナーのリベンジがなったのであった。
「驚いたぞラナー。どういうカラクリだ?」
「一度身を持って体験した事を即座に真似出来るくらいには私は優秀なんですよ、お兄様」
「どういう事だ?」
「シャルティアさんのお口での愛撫や、お兄様の指使いを私も出来る、という事です」
そう言って笑う妹に、レオンは彼女の天才性が知性だけではない事を知ったのであった。

ナーベ【前編】

王国に3番目のアダマンタイト級冒険者が生まれた。
その情報は王城にいるレオンの元まで伝わっていた。
彼からすればアダマンタイト級冒険者もその他大勢と大して変わらない存在だ。
いくら人類の切り札と呼ばれていても彼の強さには遠く及ばない。
だから、それだけでは興味を引かれる事はなかった。
しかし、その冒険者の内の一人が《王国の黄金》に匹敵する美貌の持ち主であると噂されているなら話は別である。
レオンはそのアダマンタイト級冒険者がいるというエ・ランテルの街に赴いていた。
王ではなく、まだ王子という立場ゆえのフットワークの軽さだ。
「しかし、ラナー並の美女が早々いるものかね」
レオンは隣を歩くイビルアイに話を振った。
王都からエ・ランテルまでの移動中の性処理役として連れて来られた彼女は、不機嫌そうにブスッとしている。
「……あのシャルティアとかいう化け物の例もあるだろ。だが、あの王女は長く生きて

来た私でもあまり見た事の無いレベルの美姫だ。ナーベとか言う冒険者の見た目も多少は誇張されているだろうな」

「まあ、そうだろうな。だが、そんな噂が流れる程度には美女なのだろう」

レオンもあまり期待していない様子で同意する。

それを聞き、どうでも良さそうに「フンッ」と鼻を鳴らしたイビルアイは、自分の首に付けられたマジックアイテムに触れた。

冒険者ギルドにてラキュースと共に処女を失った日から、彼女の生活は変化してしまった。

マジックアイテムでの命令は『許可なく王都を離れるな』と言うものだけではあるが、公然の面前であの様な痴態を晒しておいて、アダマンタイト級冒険者として堂々と活動出来る訳がない。

それはリーダーであるラキュースも同様であり、しばらく人の目を気にして宿に篭っていた。

その間、蒼の薔薇としての活動ていたのは王都に帰還したガガーランと、ティアとティナの3人だ。

自分達もレオンの餌食になった筈の双子だが、大して気にしておらず、むしろラキュースとイビルアイの純潔が失われた事を嘆いていた。

状況が変わったのは一月くらい前からだ。
手紙で王城まで呼び出されたイビルアイとラキュースは、そこでシャルティアと名乗る吸血鬼と会わされ『命令』によってレオンの前でまぐわされてしまった。
恐らく彼女が現在のレオンのお気に入りなのだろう。
一度抱いてその後は完全に放置されていたイビルアイと異なり、側で毎日の様に相手させているらしい。
イビルアイ達との絡み合いもその一環であろう。
圧倒的な力で押さえつけられ、無力な小娘の様に犯された記憶を思い出し、ブルッと身体を震わせる。
「……そう言えば、何故シャルティアを連れて来なかったんだ？　性処理などアイツに任せればいいだろうに」
イビルアイはふと疑問に思い訊ねる。
それに対し、レオンは「アイツは外に出せん」とだけ答えた。
不思議に思いながらも、直ぐに「あの美貌だからな」と一人で納得したイビルアイは、それ以上は何も言わずにレオンに着いて歩いた。

☆

「新たなアダマンタイト級冒険者ってのはどいつだ?」
ギルドに入ってくるなり冒険者達を見回しながらそう発言したレオンに、多くの目が向けられる。
そして、彼が悪名高き第3王子だと分かると冒険者達は一斉にギルドの一角へと視線を移した。
そこに居たのは1人の女性だった。王国では珍しい黒い髪を後ろで束ねた彼女は、一般的な旅人風の服装をしているにも関わらず、圧倒的な美で持って周囲の男達の視線を釘付けにしている。
彼女こそが『美姫』の二つ名で呼ばれるアダマンタイト級冒険者ナーベであった。
周囲につられて彼女を視界に収めたレオンは、噂通りの美貌を確認し「ほう……」と感心する。
「驚いたな。まさか本当にラナーと同レベルの美女だとは」
「……何の用かしら」
面倒くさそうに訊ねるナーベに周りの人間は緊張した様子でレオンの顔を伺う。
彼が王都で蒼の薔薇に行った非道はこの辺境の街にも伝わっている。
冒険者達は、あの高慢な美姫がレオンの怒りを買って犯される光景を思い浮かべた。

純粋に自らの街に生まれた英雄を心配する者。
逆に生意気なナーベの痴態を期待する者。
半々といったところか。
「お前の噂を聞いてな。わざわざ抱きに来てやったのだ」
「……はぁ。ガガンボとは言えその台詞は何？」
「ガガンボ？　……よく分からんが、お前が俺を舐めているのは分かるぞ」
面白そうに笑みを浮かべるレオンは、自分を前にして全く恐れる様子のないナーベをすっかり気に入ってしまった。
「大人しく俺に抱かれるか、無理やり犯されるか好きな方を選ぶが良い」
態度を見る限り彼女が大人しく言いなりになる筈がないとは理解しながらも、そう訊ねる。
「……逆に貴方が選びなさい下等生物。大人しく私の前から消えるか、それとも私に消されるか」
「ほう。俺を前によく吠えるな」
「ナメクジの分際で自分を獅子か何かと勘違いしているのかしら」
「……面白い」
レオンとナーベは共に笑顔でありながら、その目は一切笑っておらず、絶対零度の冷

たさで睨み合う。
「ナーベ、お前は確かマジックキャスターだったな。おい、イビルアイ。命令だ。先輩冒険者としてあの女に力の差を見せつけてやれ」
「くっ……了解した」
　一歩引いた位置から眺めていたイビルアイは、レオンの『命令』により強制的に矢面に立たされる。
「……おいお前。悪い事は言わない。大人しくこの男に従っておけ」
「はあ？」
「アダマンタイト級になるくらいだ。多少は腕に自信があるんだろうが、上には上がいる」
「フッ。まさか私がそんな台詞を言われるなんてね」
　イビルアイの言葉に全く聞き入れる様子のないナーベ。
　それを見てため息を吐くと、イビルアイは「恨むなよ」と呟き、魔法を発動させた。
「《サンド・フィールド・ワン／砂の領域・対個》!!」
　ナーベの周りに砂の渦が出来上がり、彼女の動きを阻害する。
　第５位階の魔法。
　アダマンタイト級の平均を上回る英雄の領域の力を見せられて尚、ナーベは余裕の表

情を崩す事はない。
「少しはやるみたいね」
「攻撃されないと高を括っているのか？　悪いがお前が降参しないなら、多少の怪我は覚悟して貰うぞ」
イビルアイは水晶の槍を宙に浮かべ、ナーベに狙いを定めた。
しかし、ナーベは全く怯んだ様子もなく両手から魔法を発動させる。
「《龍雷／ドラゴン・ライトニング》!!」
「なっ！　ぐあああぁぁぁぁっ!!!!」
龍の形をした雷がイビルアイの反応速度を超えた速さで突き抜ける。
第5位階の魔法を、それも通常の数倍の威力のそれを受けて、イビルアイはなす術もなく倒れ伏した。
着ていた服はボロボロに焼け切れ、ただの布切れの様になっている。
あまりの威力に一撃で意識を飛ばした彼女は、ピクリとも動かなかった。
見ていた男達は王国で最も有名なマジックキャスターの1人を瞬殺したナーベに歓声を上げる。
それを聞き、彼女は眉をひそめた。

「――うるさいわね。それで、貴方はどうするの？　お望みならそこの子と仲良く黒焦げにしてあげましょうか？」

自分と同等の力を持つイビルアイが一撃である。

ナーベを一般的なアダマンタイト級冒険者と予想していたレオンは、その実力の評価を数段階上方修正した。

「強いな。イビルアイは俺が知る限り4番目の強者だったんだがな。驚いたぞ」

「貴方達が弱いだけでしょう？」

「ふん。言ってくれるではないか。で？もう勝ったつもりなのか？」

挑発するようにニヤリと笑うレオン。

それを虚勢だと判断したナーベは詰まらなそうに溜息をついた。

「無様ね。この程度の力であたかも自分が絶対的な強者だと勘違いしているなんて」

「耳が痛い話だな。確かにそうだったな。少し前の俺は、だが」

「今は違うと？」

「ああ。最近は桁違いの化け物によく会うんでな。――――少し用心する様になった。やれ」

――――バンバンバンバンッ!!

レオンの声に連動する様に現れた浮遊する剣がナーベを四方から襲う。
「くっ！」
咄嗟の回避にてそれらを躱したナーベは、更に背後から切り掛かってきた襲撃者の攻撃を、何とか受け止めた。
しかし、それが限界だった。
「俺から目を逸らしてはダメだろう？」
「しまっ……ガアッ!!」
襲撃者の反対側から接近して攻撃するレオン。
完全に油断していたナーベは、頭を掴まれ、勢いのままに床に叩きつけられる。
そして、彼女の上に馬乗りになったレオンにより、首元に剣を突きつけられてしまった。
「勝負あったな」
「うっ……退きなさいガガンボ」
尚も抵抗するナーベだが、両腕の動きをレオンの膝で封じられ、更に襲撃者――――

ラキュースによって両足を固定されてしまい、僅かに身動ぎするのが限界だった。
　レベルこそレオンを凌駕し、多少は接近戦も行えるナーベだが、本職はマジックキャスターである。
　その力は純粋な戦士であるレオンには及ばなかった。
　しかし、レオンはそれでも油断せず、魔法阻害の指輪をナーベに装着させる。
「これで抵抗出来ないだろう。ラキュース。ご苦労だった」
「い、いえ……。あの、イビルアイの介抱をしたいのですが」
　もしもの時に備えてレオン達より先にギルドに入り、様子を伺っていたラキュースを労うが、彼女は倒れ伏した仲間が気になっている様子だった。
　レオンはラキュース達に「もう用はない。下がっていろ」と指示を出すと、ナーベの方へと意識を向けた。
「それにしても無様だな、お前。散々見下しておいてこのザマか？」
「……チッ……私の身体に触れたら殺すわよ」
「へえ……こんな風にか？」
　レオンはナーベの胸を鷲掴みにする。
　確かな膨らみで日頃から男達の視線を集めていた双丘は、彼の指の動きに合わせて形を変えた。

身体の動きだけでなく魔法まで封じられたナーベは、ただレオンを睨みつける事しか出来ず、胸に与えられる感触を味わう事になった。

「この辺りが先端(乳首)か？」

「んっ…触らないでくれるかしら？　気持ち悪い」

「確かお前には相棒がいた筈だな。どうせ毎晩ベッドの中で揉ませているんだろ？」

「……モモンさ―んを貴方と一緒にしないでくれる？」

服の上から乳首を擦られ、僅かに感じ始めているナーベだが、敬愛する主人についてレオンが触れた瞬間、凄まじい殺気を放って彼を睨み付ける。

「この状況でまだ反抗するのか」

「犬に噛まれただけ……いえ、虫に刺されただけだと割り切ってもいいのだけど、この身体は至高の御方の物。貴方はもちろん私自身にも自由にする権利は無いわ」

「何を言っているのか分からんが、お前の身体はもう俺の物だぞ。――飲め」

「んっ!?」

瓶に入った謎の液体を飲まされたナーベは、直ぐに自身の身体に起き始めた変化を感じて戸惑う。

体温が上昇し、いつも以上に肌が敏感になっている気がする。

白い肌が赤く色付き、瞳も濡らし始めた彼女の姿に、冒険者の内の1人がゴクリと唾

を飲み込んだ。
「股を擦り合わせているが触って欲しいのか？」
「んっ……媚薬、ね。私を抱くのに仲間だけでなく薬も使うなんて、虫ケラの中でも特に詰まらない男ね」
「言っていろ。これは八本指特製の媚薬でな、化け物みたいなアンデットだろうが、異常な精神力の王女だろうが発情させた代物だ」
そう言ってナーベの胸元の服を引き裂いたレオンは、露出した果実の頂き（乳首）を指でつまみ上げた。
その瞬間、身体中を電流が走り、ナーベは堪らず大きな嬌声を上げる。
「あああっっ♡」
「ふん。良い声を出すではないか。ほら」
「んんんっ!!!」
数度摘（つま）まれただけのナーベの乳首は、白い乳房の先でツンと尖り、男達の視線がその一点に集まる。
美しきアダマンタイト級の冒険者の、その淫らな姿に何人かは我慢出来ずに自身の股間に手を伸ばした。
「それにしてもここまで綺麗な胸は見たことがないな。乳首の色もそうだが、形が完璧

だ。ラナーやラキュースの胸でさえこれ程ではなかった。まるで作り物だ」

「くっ。当然でしょう……？　貴方なんかが触れて良い物ではないの…」

胸を揉まれ、押し寄せる快感に甘い声を漏らしながらも、ナーベの目は依然としてレオンを睨みつけている。

「ふふっ。いつまでその態度が続くか見ものだな」

レオンは、ナーベの胸から手を除けると自身のズボンの中に手を突っ込み、そそり勃った肉棒を取り出した。

それをナーベの双丘の間に挟むように置く。

そして、胸を両手で掴み、自分の一物を挟むと腰をゆっくりと動かし始める。

「ふはは！　虫けらに胸を使われる気分はどうだ」

「……んっ……さ、最悪ね……」

下等種族ごときに身体を使われる屈辱に、ナーベは顔を歪める。

殺意はこれまでに無い程溢れているのに何も出来ないもどかしさ。

至高の創造主により作られた身体を汚される悔しさ。

そして唯一残った慈悲深き御方に失望されるのではないかという不安。

そういった様々な感情がナーベを更に追い詰めた。

――バンバンバンバン！

レオンが腰を振る度に、ナーベの胸に包まれた肉棒が顔を出しては引っ込んで行く。
それを至近距離で見せつけられ、顔を背けるくらいしか抵抗出来ないナーベは、少しずつ与えられる快感に息を乱し始めた。
手と肉棒で乳房を刺激され、思い出したように乳首を触られる度にナーベの抵抗が少しずつ弱まる。
それを期と見たレオンは腰の動きを加速させ、彼女の乳房を犯していった。
様子を見ている冒険者達は、自分達では手も足も出ない強い女(ナーベ)が、まるで性処理の道具の様に扱われる光景に目を離せないでいた。
最初こそ必死に身体をくねらせ、レオンの下から抜け出そうとしていたナーベが、今では諦めた様に、ただ荒い息をして胸を上下させるだけになっている。
実は身体に回りきった媚薬の副次効果によって力が抜けているだけなのだが、側(はた)から見る者にはナーベが屈服していく様に映った。
美貌と実力を合わせ持つ最高級の女性を屈服させる。
それは正に男の夢だろう。
少なくともその場にいた男達はレオンに尊敬の念を抱いた。

「……もう少しだな。おいナーベ。顔をこちらに向けろ」

「んんっ！　……だ、誰が従うか……っ」
「ああ、別に期待してねぇよ。おらっ」
「っ!?」
レオンがナーベの髪を掴み、無理矢理肉棒の方に顔を向けさせる。
自身の胸の間から顔を出した一物を数センチの距離から観察することになったナーベは、それがビクビクと痙攣している事に気付いた。

そして遂に――――

「顔面で受け止めろ!!」
「なっ……や、やめっ……あああああっ!!」

――――ドピュ　ドピュ！ドピュッッ!!!!

いわゆるパイズリを始めてから数分。
限界を迎えたレオンの欲望は、ナーベの美しい顔に向かって解き放たれた。

ナーベ【後編】

顔中に白濁の液体をかけられたナーベは怒りの篭った瞳でレオンを睨み付けた。
しかし、癖の強い匂いが鼻から入ってきた瞬間、その眼光を軟化させる。
理性では当然、下等生物の汚い体液の匂いに対し嫌悪感を抱いている。
しかし、それ以外の部分で、その匂いに強烈に惹かれている自分に気付いた。

――ジュクッ……

彼女の女の部分が雄の匂いに反応する。
下腹部の奥から何かが昇ってきて、大切な場所が濡れていくのが分かった。
「どうした？　随分と大人しくなったが」
「……な、なんでもないわ」
「はん。そんな潤んだ目で見て来ておいて「なんでもない」はないだろう」
媚薬の効果を体験済みのレオンはナーベの変化に直ぐに気付いたが、当の彼女自身はそれを理解出来ない為、戸惑った様に視線を彷徨わせている。

あのラナーやシャルティアでさえ抗えなかった媚薬効果は、ナーベにも覿面だった。

それを愉快そうに眺めたレオンは「今ならいけるだろう」との確信のもと、精液で汚れた男性器をナーベの顔に近付けた。

「おいナーベ。これを舐めて掃除しろ」

「……嫌に決まっているでしょう？　その粗末な物をサッサとしまったらどう？」

「形だけの拒否はいいから早くやれ」

「？　心からの拒否なのだけど」

「なんだ、気付いてないのか？　お前さっきから俺の肉棒に熱い視線を向けているだろう？　口もこれを舐めたそうに開いているぞ」

「な!?」

慌てて口を閉じ、顔を逸らすナーベだが、その抵抗は何の意味も無かった。

レオンはナーベの腹に座っていた身体を少し前進させる。

そして、彼女の胸の上に座る体勢になった彼は、ナーベの後頭部を掴むと、力付くで自分の肉棒に唇を触れさせた。

「んっ――――!!!」

口を強く閉じて必死に抵抗するナーベ。

レオンの肉棒は彼女の唇こそ突破したが、その奥の歯によって口内への侵入を拒まれ

ていた。
もし普段のナーベならば、その肉棒を噛み千切るくらいの事はしただろう。
しかし、発情させられ、思考も混乱気味の今の彼女の中に、その選択肢は浮かんでいなかった。
「チッ。仕方ないな」
いつまでも抵抗をやめようとしないナーベに、レオンは攻め方を変える事にする。
ナーベの頭を掴んでいた右手を自分の背後に回すと、そこにある彼女の下半身に這わせた。
そして、ズボンの上から性器をなぞり始める。
「あぁぁ!!…そ、そこに触るなっ」
ふにふにとナーベの割れ目を刺激してやると、彼女の身体は面白い様に反応する。
媚薬によって高められた身体に与えられる快感は、ナーベをして我慢する事はできない程だ。
顔を蕩けさせ、甘い声を出す彼女は、恐らく無意識なのだろう、レオンの手を受け入れる様に脚を開いていった。
「んんんっ!!!　あ、ダメっ……っ」
「ん？　身体が震えて来たな。とりあえず一度イっておくが良い」

「んあああっ♡♡♡……ううぅぅあああ!!!」

そして遂に、ナーベは多くの冒険者に見られる中、最初の絶頂を迎えた。

いつの間にかズボンの股の部分にはエッチな染みが出来ており、手マンしていたレオンの指をヌルヌルと濡らしている。

ペロリと指に付着した愛液の味を舐めて確認すると、レオンは自身の下で息を整えているナーベを見下ろした。

汗で顔に張り付いた黒髪は扇情的で、甘い息を吐き出す唇は僅かに開いている。

潤んでこちらを見上げる瞳には、最早拒絶の色はなく、レオンはもう一度肉棒を彼女の顔に近付けてみた。

「舐めろ」

「……ハァ……ハァ……は、はい……」

――チュッ

肉棒の先端にキスをしたナーベは、その後舌を出して白い液体を舐め取っていく。

レオンが更に肉棒を前に突き出すと彼女は拒否する事なく口内に受け入れた。

完全に言いなりになったナーベは、表情こそ嫌そうに歪めているものの、口の動きを休ませる事なく、肉棒を舐めていった。

☆

「綺麗に掃除してくれたな。褒美をやろう」
「……褒美？」
「ああ、お前が今一番欲しい物を欲しい場所にやる」
そう言ってレオンは、ナーベのズボンに手を掛けた。
バッと一気に脱がされたズボンは、見物中の冒険者達の方へ放り投げられる。
そうして露わになったのは、黒色レースのショーツだった。
少し野暮ったかった服装とは真逆の色気のある花柄の下着は、黒髪黒目のナーベの容姿に完璧にマッチしており、彼女の魅力を最大限に引き出している。
そこらの貴族でも使用していない様な高級感溢れる下着を見て、冒険者達はナーベの素性に思考を巡らせていた。
そして元々あった、北方の王族ではないかとの噂と合わさり、多くの人はナーベを亡国の姫君だろうと結論を下す。
冒険者達はそんな姫君のあられもない姿を見ている事を再認識するとこれまで以上に欲望を募らせていった。
レオンはしばらく彼女の姿に見惚れた後、その下着に指を掛けゆっくりと下ろして

いった。
その様子を抵抗する事なく静かに見守るナーベは、一瞬よぎった「今なら隙を突いて逃げられるかもしれない」という考えに蓋をする。

『おおおお!!!』
現れた絶景に、冒険者達は歓声を上げる。
脱がされた下着は、性器から糸を引きながら離れていく。
その下から見えたのは黒い茂みだった。
しっかりと生え揃った陰毛は、愛液で濡れて肌に張り付いており、これ以上なく卑猥に映った。
ピタリと閉じられた太ももにもエッチな雫が流れて行き、茂みに隠れた性器の状態を物語っていた。
昼間の冒険者ギルドで最高位冒険者が全裸にされるという異常事態を不思議に思う者はもういない。
「ナーベちゃんのマン毛……意外に濃いな」
「あの子がマジで王族なら、俺はお姫様の裸見てる事になるのか」
「くくっ。こんな大人数に見られてオマンコをあんなにびしょ濡れにしているとか、と

んだ淫乱姫だな」
「漆黒のモモンはあそこに毎晩チンコを突っ込んでんのかな」
まるで何かの見世物を観賞している様に口々に感想を述べていく冒険者達。
彼らのその言葉を聞いて、ナーベは怒りで顔を赤くする。
しかし、ここで何を言っても滑稽なだけだと理解している為、何も言わずに睨み付けるに留まった。
「あまりよそ見をするな」
「んんっ！」
意識を周囲に向けていた彼女は、唐突に割れ目を撫でられ、ビクッと反射的に腰を引く。
直接触れての刺激は想像以上のモノで、レオンの指が離れてもその感触が消えることはなかった。
レオンはナーベの足首を掴んで引き寄せると、彼女の脚を大きく開かせる。
あまりに無様な格好に、ナーベは必死に脚を閉じて抗おうとする。
しかし、レオンの力に敵う事なくM字に開かれてしまった。
「くっ…やめっ…」
「全裸を晒しておいて今更だろうに」

丸見えになった陰部を手で隠そうとするナーベだが、その手はレオンによって阻まれる。

そのままナーベの背後に回った彼は、冒険者達に見せつける様に彼女の脚を抱え上げた。

マングリ返しの様な格好になったナーベは、秘すべき全てを晒す事になった。

レオンが陰毛を撫でると、その下に隠れていた割れ目が皆の目に触れる。

僅かに花開いた割れ目の奥では膣口がビクビクとイヤらしく震えており、さらにその下に視線をやると綺麗なピンク色の菊門まで見えていた。

レオンはナーベの膝の下に手を入れるとそのまま抱え上げた。

そして後ろから滑り込ませた肉棒を彼女の女性器に触れさせる。

「それじゃあ入れるぞ」

「……勝手にしなさい」

「くくっ。それじゃ遠慮なく」

――ずにゅうううう!!!!

「あ、あああ、あああああっ♡♡♡」

少しずつ挿入されるレオンの一物は、狭く閉じていたナーベの膣内を押し進んでいく。

内壁にある無数のヒダは彼の肉棒に絡みつき、愛液でコーティングする。
途中、微かな抵抗もあったが無視して奥へと押し込む。
そして遂に、ナーベの膣はレオンの一物を根元まで飲み込んだ。
そこでレオンはポタポタと床に落ちていく赤い液体に気が付いた。
「あん？　お前処女だったのか。てっきり相棒とやりまくっていると思っていたぞ。ふん。嬉しいサプライズだな」
「はあぁっ！んっ、んっ、んあっ♡」
「しかし、処女でもここまで乱れるとは大した薬だな、おい」
「ああっ、ひぃっ、あっ、やっ、あああっ!!」
レオンが腰を振る度にナーベは甘い声を出す。
最初のクールな対応どころか周囲に対する嫌悪感も一切霧散させて、ただ喘ぐだけとなった彼女は叩きつけられるレオンの下半身に表情を蕩けさせる。
主人や仲間から失望されるかもしれない。
そんな不安は最早ナーベの中にはなかった。
ただ、今はこの湧き上がる情欲を発散させたい。それだけだった。
それから十分近く。
ひたすら犯され続けたナーベは、身体中から体液を出し甘い声で喘ぎ続けた。

「あああっ！　んあっ、ああっ！」
「気持ちいいか？　ナーベ」
「は、はいぃ！　きもちっ、いいっ！　んあああっ♡」
「俺みたいな下等生物に抱かれて良かったのか？」
「い、いいっ、あああっ、ひいいっ!!!」
　上下に大きく揺れる乳房、肉棒を飲み込んだ性器、その上の小さな肉芽まで全てを見られながらナーベは与えられる快感に乱れ続ける。
「あああっ、くるっ!!　んああっ！」
「イきそうなのか？　あん？」
「は、はいぃ！　あああんっ♡イ、イクッ!!」
「そうか。なら、俺が言う通りに叫んでからイけ」
「??? は、んっ、はいいいっ♡」
「――――――だ。わかったな」
「わ、わかっ、んあっ！　わかり、ましたっ!!」
　そして遂にナーベは限界を迎える。

「あああああああっっっっっ!!!!!　いくぅ!!!　なーべはっ!!　れおんさま、のっ!!　おちんぽんでっ!!!　おまんこ♡こすられて、んあっ!!!　イック、イックぅうっ、イきますぅぅうう!!!!　んあああああっ♡♡♡♡♡」

!!!!!

「許さない……許さない許さないっ！　楽に死ねると思うな下等生物が!!」
「チッ。良い気分が台無しだな」
先程までの自分の痴態を思い出し、その原因に怒りをぶつけるナーベ。
レオンは追撃してきた彼女に足をかけて倒すと、その背中を踏みつけた。
そして懐から取り出したマジックアイテム――支配の首輪――を彼女の首に装着する。
「ちゃんと着けれたな」
「なにを『黙ってろ。膝を付け。動くな』んんっ?!」
「ちゃんと効いてるな。いや？　もう少し確かめといた方がいいか。『ケツをこちらに向けて淫らに振ってみろ』」
「?!!」
意思に反して臀部を突き出し、クルクルと円を描く様に振るナーベ。
男を誘う卑猥な動きをする彼女の顔は、屈辱によって酷く歪められている。
レオンは晒された彼女の性器に手を伸ばすとクチュクチュと弄り始めた。
そして無防備な体勢で、敏感な所を刺激されたナーベは、本日3回目となる絶頂を味わい、悔しさに涙を流す。
それを見て満足気に頷くと、レオンは「ついて来い」と言い、唖然とする冒険者達を

置いてギルドの扉を開いた。

『支配の首輪』

自分より弱い存在か、屈服させた存在を支配下に置く効果の込められたこのアイテムを、レオンはまだまだ保持している。

☆

街の英雄が全裸でギルドから出てくる姿を目撃した人々は、ただ立ち尽くしてそれを見送る事しか出来なかった。

血や愛液で汚れた下半身を見ればギルドの中で何があったかなど一目瞭然である。

ここしばらくエ・ランテルから離れている漆黒の英雄がいないのを良い事に、嫉妬した冒険者達が美姫を集団で犯したのではないか、という噂が流れるのも仕方なかった。

大浴場

夕食が終わり、日が沈み始めた頃ラナーは専属のメイドを伴って廊下を歩いていた。
その足取りは心なしか軽く感じられる。
彼女達が向かっているのは王宮内にある大浴場であった。
「今日はお兄様に呼ばれなかったから、身体はあまり汚れていないわね」
「それでも外へ散歩に行かれましたのでしっかりと湯に浸かった方がよろしいかと」
「ふふ。そうね。アレもしなきゃだものね」

同性でさえ見惚れてしまいそうな笑顔を振りまきながら進むラナー。
そんな彼女とやり取りするメイドの声には抑揚が感じられず、表情は人形の様な無表情であった。
それは別に彼女が不機嫌であったり、怒っているからなどでは決してない。
ただ仕事中に感情を露わにしないという彼女のメイドとしてのスタイルである。
しかし、元々感情が顔に出難いこともあって以前仕えていた第一王女から疎まれラナーの専属へと収まったという過去があった。

実はこれでラナーに対する忠誠心はかなり高い。
そしてそれを理解しているラナーからも使える駒として認識されていたりする。
そんな主従2人は長い廊下を抜け、ようやく目的地にたどり着いた。
慣れた様子で扉をくぐると、大浴場の中へと足を踏み入れる。
同時に５０人程が利用出来る広い浴場は、しかし王族か王族に許可された客人しか利用することが出来ず、脱衣所もガランと空いていた。
ただ1人いた先客はラナーの姿を見つけると笑顔で手を振ってくる。
「奇遇ね、ラナー。先にお邪魔させて貰ってるわよ」
「ラキュース！今日も王宮に来ていたのね」
「…レオン殿下に呼ばれてね。それより一緒しても大丈夫かしら？」
「ふふっ。勿論よ」
天使の仮面を貼り付けたラナーは先客――ラキュースに微笑むと「一緒に入りましょう」と返事をした。
ラナーの許可を得たラキュースは脱ぎかけていたドレスに手を掛け、スルスルとほどいていく。
そして、あっという間に下着のみの姿になった。
大人っぽい黒い下着を身に付けた彼女の身体をラナーはこっそりと観察する。

自分よりいくつか歳上なだけの彼女の身体は女性としてかなり完成しており、ブラジャーに包まれた双丘は、男性なら目を惹きつけられてしまうに違いない。

事実、色欲の権化の様な兄王子だけでなく、愛しい少年騎士（クライム）さえ何度か目を奪われている所を見た事があった。

自分の小振りな胸を見下ろしたラナーは「この女、もうあまり価値ないし殺そうかしら」などと物騒な事を考える。

そんな事など知るよしもないラキュースは淡々と下着を脱いでしまい、ラナーの前に全裸を晒していた。

と、そこでラナーの方を振り向いた彼女は服を脱ぐ気配もなく自らをジーっと眺める視線に気付く。

「え、えっと…どうしたの？早く行きましょう？」

いくら同性であり、そして浴場という場であっても服を着た人の前で全裸を晒すと言うのはなかなか恥ずかしいモノがある。

それはアダマンタイト級の冒険者だろうと関係なく、ラキュースは照れた様にタオルで自分の身体を隠した。

タオルの端から見え隠れするピンクの乳首や、金色のアンダーヘアをチラッと見た後、ラナーは「ごめんなさい。先に入ってて」と笑顔で浴場の方へと促した。

ラキュースが脱衣所の向こうへと消えたのを見送ると、ラナーはメイドの方を振り向く。

「じゃあ、お願いね」

「はい。では失礼します」

シュルシュルと言う音と共にラナーの着ているドレスが脱がされていく。

それを行なっているのは彼女の背後に回ったメイドである。

王国の貴族の中には自分で着替えをしない者もそれなりにいる。

それは服の作りが複雑すぎて1人では脱ぎ難かったり、そもそも自分で着替えれる様な構造では無かったりと様々な理由からであるが、ラナーに関しては生まれてから一度も自分で着替えを行なった事がない為に最早それが当たり前となっている。

大抵は年頃になると羞恥心を覚え、自分で行う様になっていくのだが、彼女に関してはそんな物とは無縁であった。

普通の人間が動物相手に裸を見られて恥ずかしいと思う事などない様に、彼女は他の人間に裸を見られても何とも思わない。

そういった事情からラナーは着替えをメイドに任せていた。

「ラナー様。両手を広げてください」

「はい」

あっという間にドレスは完全に脱がされ、ラナーの足元に落ちる。

下着姿になった彼女は、クルリと振り返りメイドの方へと身体を向けた。

メイドも馴れた様に手を伸ばし、ブラジャーのフロントホックに指をかける。

カチッ

小さな音を立ててホックを外されたブラジャーは、そのままメイドによって奪われる。

そうして露わになったのは手に収まるサイズの小さな乳房と、ツンと勃った綺麗な乳首であった。

別に興奮している訳ではない。

肌寒い廊下を歩いて来た為に身体が冷え、その結果起きた生理的反応に過ぎない。

しかし、それでも美しい王女が乳首を勃たせている。

そんな性を感じさせる姿はどうしようもなくクるモノがあった。

流石のメイドも一瞬だけそれに目を奪われる。

それでも直ぐに目を逸らし、最後の下着へと目を向けた。

「失礼します」と言いながらラナーのショーツに指を掛けるとゆっくりと下ろして行く。
　金色の陰毛と縦に割れた幼い陰部が露わになり、そしてそのまま下着は完全に脱ぎ取られてしまった。
「タオルをどうぞ」
「ありがとう。貴女も早く脱ぎなさい」
「はい。少しお待ちください」
　主人の服を脱がせたメイドは今度は自分の服に手をかける。
　裸のまま主人を待たせる訳にはいかず、１０秒ほどでメイド服を脱いだ彼女は、白い下着姿になった。
「お待たせしました」
「もうっ。そんなに急がなくてもいいのよ?」
「長い時間裸のままでは風邪を引いてしまいますから。では、ラナー様。浴場に行きましょう」
　メイドに促されたラナーは、ラキュースがいる手前、照れた様にタオルで身体を隠しながら浴場に繋がる扉を開けた。
　そしてその後ろを下着姿のメイドが付いていく。

☆

１０人が同時に使える洗い場では、ラキュースが身体を洗っていた。
ラナーは彼女の隣に腰を掛ける。
「待たせたかしら?ラキュース」
「それは別に構わないのだけど……その、彼女はどうして下着のままなのかしら」
「彼女なりにこだわりがあるのよ」
ラナーとラキュースの２人から視線を向けられたメイドは小さく頭を下げて礼をした後、口を開いた。
その立ち振る舞いはメイド服を脱いでも尚、完璧な使用人のそれである。
「主人に裸を見せる事は不敬にあたりますので。本当なら服を身に付けたまま奉仕したいところですが」
「この間そう言ってメイド服をびしょ濡れにしたのよね」
「はい。残念ながらアレでは仕事に支障が出てしまいます。ですので、お見苦しいかも知れませんがこの姿で奉仕させて頂きたく思います」
「…別に貴女達がそれでいいのなら私から言うことはないわ」
少し困った様にそう返すと、ラキュースは身体を洗い始めた。

許可が出たと判断したメイドは、風呂椅子に座るラナーの背後に回るといつも通り作業を開始した。
「髪から洗いますね。少しの間目を閉じて下さい」
「はい」
「ではシャンプーをつけていきます」
「んっ…」
「泡を流しますね」
「んん～っ」
メイドは手馴れた様子でラナーの髪を洗っていく。
ラナーはそれを当然の様に受け入れてされるがままに任せていた。
時間にして5分程。
髪の毛先まで綺麗に洗い終わる。
頭皮へ軽くマッサージを行いつつ、あまり時間をかけないプロの手際であった。
「終わりました。次は身体の方を洗っていきます」
「お願いね」
一声掛けた後、メイドは身体を洗う為に床に膝をつき、ラナーの身体を隠していたタオルを自然な手際で奪う。

そして、手の中で石鹸を泡立てると掌で直接身体を洗い始めた。
――ースッスッスッ
肩、背中、腕の順に丁寧に擦っていく。
時折ラナーの口より「んっ…」と悩ましげな声が漏れるが気にせずに続ける。
――そしてその手は身体の前側に回り、ラナーの2つの膨らみへと近付いていった。
「んんっ」
ラナーはそれまでより少し大きく声を漏らす。
彼女が視線を下に落とすと、そこにはメイドの掌に収まる自分の胸が目に入った。
メイドの手はそのままゆっくりと動き、小さな乳房を上下左右にと動かし始める。
胸の先端が掌で擦れる度にラナーの身体が小さく反応する。
明らかに他の場所に掛けるより長い時間、彼女の胸は洗われ続けた。
いや、弄ばれ続けたと言った方が正しいだろうか。
それからたっぷり時間を掛けて刺激を受けた乳首は、すっかり固く勃っていた。
メイドは最後にその突起を指で摘み、軽く擦り合わせた。
ビクンッと大きく震えるラナーの背中。
それを見届けると、メイドは彼女の胸から手を退かせた。
チラッと鏡を確認する。

鏡の中で頬を染めたラナーと目が合い、メイドは小さく頭を下げた。
そして「次の場所を洗います」と言うと両手を胸から下におろしていった。

下腹部に伸ばされたメイドの指はサラサラとした感触を捉える。
「ここ少し伸びてきましたね。また剃っておきましょうか?」
「そうね。…一応お兄様の許可を取ってからにするわ。偶に触ってくるもの。多分ソコはあった方が好きなんだわ」
「かしこまりました。では今日は洗うだけにしておきます」
隣で聞いている初心な娘(ラキュース)が耳まで赤くしている事には気付かず、主従は会話をする。
2人が話しているのは勿論ラナーの下の毛についてである。
ラキュースはチラリと親友(ラナー)の秘部を覗き見た。
彼女の股の間にある黄金の茂みは本当に薄っすらとした物だ。
所謂Vラインにしか生えていない。
その下にある幼い割れ目も殆ど隠せておらず、顔を出していた。
正直、ラキュースの物と比べると半分以下の密度だろう。
剃毛(パイパン)の風習はない王国ではラキュースくらいが普通である。
しかし、他人の陰毛など早々見る機会はない。

その為、2人の会話を聞いて「もしかして自分は毛深いのでは!?」と勘違いしてしまったラキュースは、恥ずかしそうにそっとタオルを下半身に被せた。

時間をかけてしっかりと泡立てた手をラナーの陰毛に絡ませる。
洗いやすい様にと自然に脚は開き、鏡越しに王女の秘すべき場所が丸見えとなる。
メイドの手は遠慮なくそこに滑り込まされた。
毛の上で円を描く様にして指を動かす。
その動きに合わせて泡に塗れた金色の毛先も右、左と向きを変えた。
時折指で挟んで梳くようにして洗う。
何本か指に絡まり抜けてしまった。
それを数度繰り返した後、お湯で泡を流す。
すると泡の中から洗う前より光沢を増した茂みが現れた。
メイドが確認する様にサラサラと撫でると、ラナーは流石に恥ずかしそうに頬を染める。
勿論演技だが。

「ではラナー様。もう少し脚を広げて下さい」

陰毛の確認が終わり納得した様子のメイドは次の場所を洗うべく主人の脚を大きく開かせた。
元々、秘部が見える程開いていた脚を更に広げられた事で淑女らしからぬ格好となる。
しかし、ラナーは特に不満を言うことなく従う。
流石に他の人の目があれば躊躇するが、今日は親友のラキュースがいるのみ。
ラナーの良からぬ噂を流すなんて事はないだろう。

――ーそれに目的の為でもある。

そのラキュースは、隣の様子が気になり度々視線を向けては顔を赤くしているが。

「少しくすぐったいかも知れませんが我慢して下さい」
「…その、優しくお願いね？」
「はい。かしこまりました」
さて、上から下に洗って行けば陰毛の次は勿論陰部である。
何気に自分で洗うのが難しいこの場所は、幼い貴族令嬢なら使用人に洗わせる者も多

かったりする。
鼠蹊部から太ももの付け根に掛けて摩るように手を動かし、下半身の緊張をほぐしていく。
くすぐったい感覚にラナーの脚が僅かに震えるが、メイドは気にせず続ける。
そして、それを何度か繰り返した後、大陰唇に指を掛け左右に開いた。
「やっ…」
クパァと広がる割れ目。
その中にある陰核や尿道が外気に触れ、ラナーは小さく声を漏らした。
先程胸を触られた為だろう。
お湯とは異なる粘り気のある液体がキラキラと光っていた。
その様子は隣のラキュースからもよく見えいる。
無垢な美しい王女がメイドの手によって最も大切な場所を暴かれ、そしてエッチな汁を流している。
潤んだ美しい顔と合わさり、とてもいやらしかった。
ラキュースは無意識に太ももを擦り合わせる。
「それでは中を洗っていきます」
そう言うとメイドは割れ目の中を撫でるようにして洗い始めた。

☆

それから時間をかけて全身を洗われたラナーは、ラキュースと共に湯船に浸かり一息ついていた。

２人は何気ない会話を楽しみ、笑い合う。

ラナーがクライムの事や王宮での出来事を話せば、ラキュースは仲間の事を話す。

それは仲の良い親友同士に見えるのだが、主人の本性を知っているメイドには悍ましいナニカにしか見えなかった。

壁際に立って待機していた彼女は、会話がひと段落するのを見計らって主人に声を掛けた。

「ラナー様。今日はアレはどうしましょうか」

チラリとラキュースを見ながら訊ねれば、ラナーも親友の方を見て少し考える素振りをする。

そして開き直った様な表情で「お願いするわね」と答えた。

「ラナー？アレって何かしら」

「ふふ。少し恥ずかしいのだけど、見ていたら分かるわ」

立ち上がって湯船の縁に腰掛けるラナーは、首を傾げながら質問するラキュースに笑

顔で返す。
その背後には近付いてきたメイドが膝を着いた。
そして「失礼します」と言ってラナーを抱きしめる様に腕を身体の前に回した。
「あっ……♡」
「え？」
ラキュースが驚いた様に声を出したが、それも仕方ないだろう。
メイドの手がラナーの胸と秘部に伸ばされ、そこを優しく愛撫し始めたのだから。
先程の身体を洗う行為とは全く違う。
メイドの指は主人の尖った乳首を転がし、陰部を弄る。
その度に美しい王女は「んっ…」「あんっ…♡」と、その小さな口から気持ち良さげに声を漏らしていた。
「指を入れますね」
「はっ…はぁい……」
数分もしない内にメイドの細い指を大切な場所に受け入れ始める。
入れやすい様に開かれた脚の間で伸ばされた腕がゆっくりと動き、小さな穴に指を出し入れする。
そして、少しもしない内にいやらしい水音がラキュースの耳に聞こえてきた。

「ラ、ラナー、何をしているのかしら?!」
「んんっ…見た通りよラキュース…っ……ああっ」
「み、見た通りって…」
刺激に耐えるのに精一杯のラナー。
それを見かねてメイドが変わりに説明する。
「私は元々第一王女様の性欲処理をしていたのです」
「せ、性欲処理…?」

☆

彼女がラナーの専属になった一年前。
今日の様にラナーの身体を洗っていた彼女だったが、それまでの習慣からほぼ無意識にラナーに愛撫を行い、イかせてしまったことがあった。
我に返って謝罪する彼女を、その時は笑顔で許したラナーだったが、内心ではどう処分しようかなどと考えていた。
しかし、しばらく側においている内にこのメイドの口の固さやラナーに対する忠誠心を理解した彼女は、考えを改め、自らも性欲発散を頼む様になった。
ラナーも身体は思春期の少女と変わらず、愛する少年と接する事でフラストレーショ

ンが溜まる事もあった。
自分で発散出来れば良かったのだが、なまじ他者より理性が強いが為にその行為はどうしても嫌悪感を抱いてしまいできなかった。
その為、勝手に性欲を発散させてくれ、自分に不都合な事もしないならと週に一度の頻度で彼女の愛撫を受け入れる様になったのである。
☆
「んあっっ……！」
膣内を焦らされる様に刺激され、五分。
遂にラナーは親友の前で絶頂を迎えてしまった。
身体を一度大きく跳ねさせた後、小刻みに何度も震える。
「はぁ…はぁ…気持ちよかったわ」
「それは良かったです」
力が抜けたのかラナーはメイドに背中を預ける様にして息を整える。
主人からの言葉に少し微笑んだメイドは「ところで」とラキュースの方に顔を向けた。
「ラキュース様もいかがですか？」
「え!?わたし？」
「はい。先程からご自分で慰めている様ですが、あまり慣れていない様ですので。宜し

ければ私が致しますが」
「なっ!?」
湯船の中で秘部を弄っていた手を慌てて引っ込めた。
その反応で図星なのだと判断したラナーは、メイドの提案に賛成し彼女の手を引いて立たせる。
「ラキュース。遠慮しなくていいわ。さあ、私の隣に座って」
「あっちょっと、ラナー」
親友の手を振り解く訳にもいかず、流されるままにラナーの横に座らされる。
身体を隠していたタオルも奪われたラキュースは、2人の顔を見返し、そして――
「その……お願いするわ」
――ー潔く諦める事にした。

☆☆☆

『先程から思っていましたが、ラキュース様は下の毛が濃いですね』
『や、やっぱり!?あ、撫でないでっ』
『どうしたらこんなに大きくなるのかしら』

『あんっ、や、やめてラナー、胸揉まないでっ、んああっ！』
『おや？これはクリトリスですか。固くなっていますね』
『あ、いやっ、摘まないでああああっ!!!!』

☆

レオンの自室。
そこでレオンはラナーから受け取った映像記憶の効果のある魔道具を使っていた。
部屋の壁では丁度、ラキュースが絶頂を迎える映像が映されていた。
「これでよろしいですか？お兄様」
映像の中の無邪気な姿とは全く異なる黒い笑顔でラナーは訊ねる。
「ああ。言った通り撮れているな。礼を言うぞ」
「はあ…。では私はもう行きますね」
ラナーはめんどくさそうに溜息を着き、部屋を後にする。

大浴場での出来事、あれは全てレオンの指示であった。
ラナーがメイドに性欲処理をさせているのは事実であり、それを偶然知ったレオンがその様子を撮影してくる様に命令したのだ。
そして、ついでの様にラキュースも巻き込む様に指示し、ラナーと浴場で会う様に調

整したのである。